昭和七年五月

文樂人形淨瑠璃芝居

第三回任意投票ポスター

東京劇場

東京劇場の五月は

大阪 文樂座人形淨瑠璃芝居

一座全部引越大興行

當る四十日より迄八日十五日間（藝題三日間づつ五回替り）

第三回藝題（自十日至十二日三日間）

菅原傳授手習鑑　車場の段

傾城反魂香　吃又名筆の段

近江源氏先陣館　和田兵衛上使の段　盛綱首實驗の段

梅川忠兵衛冥途の飛脚　淡路町の段　封印切の段　新口村の段

三勇士名譽肉彈

昭和七年五月十日初日

毎日三時開演

御入場料

一等（御一名）金四圓
二等（御一名）金二圓八十錢
三等（御一名）金一圓八十錢
三階（御一名）金八十錢

前賣券御利用願上候

諸種の御會合にはお芝居の御利用を願ひます。
電話京橋五一五一より五一五五まで

電車――歌舞伎座前――本願寺前――下車

築地 **東京劇場**

電話京橋（五一五一より五一五五まで

太夫・三味線連名

竹本相益太夫
竹本若松太夫
豐竹英太夫
鶴澤友花
竹本津之子太夫
鶴澤綱治
竹本土佐子太夫
鶴澤小重
竹本越名太夫
豐澤仙三郎
豐竹長太夫
鶴澤友駒
豐竹小松太夫
野澤吉貞
竹本播路太夫
野澤市之助
竹本淀路太夫
豐澤團伊三

竹本文太夫
鶴澤友造
竹本南部太夫
野澤吉彌
竹本鏡太夫
鶴澤友衛門
豐竹つばめ太夫
豐澤仙糸
豐竹呂太夫
鶴澤叶
竹本相生太夫
鶴澤清二郎
竹本大隅太夫
鶴澤道八
豐竹古靱太夫
鶴澤清六
竹本土佐太夫
野澤吉兵衛
竹本津太夫
鶴澤綱造
鶴澤友次郎

人形遣連名

吉田榮三
吉田文五郎
吉田玉次郎
吉田玉七
桐竹政龜
吉田玉松
吉田小兵吉
桐竹紋十郎
吉田玉幸
吉田扇太郎

桐竹門造
桐竹紋太郎
吉田玉德
吉田傳之助
吉田瓢壽呂
吉田文作
吉田玉市
吉田光之助
吉田兵次
吉田覺三郎
吉田文之助

文樂人形淨瑠璃擁護會規約

第一條　本會は文樂座人形淨瑠璃擁護會と稱す

第二條　本會は文樂座人形淨瑠璃及斯道を擁護するを目的とす

第三條　本會の趣意を贊成するものを以て會員とす

第四條　本會の趣意に贊成し金壹百圓以上を寄附したるものを特別會員とす

第五條　本會に左の役員を置く

會長　一名　副會長　一名

理事　十名　評議員　若干名

第六條　評議員は總會に於て選擧し會長副會長及理事は評議員會に於て選擧す

第七條　役員の任期は三ヶ年とす

第八條　本會の經費は會費及寄附金を以て之に充つ

第九條　本會の會費は年額金六圓とす

第十條　本會は右會費六圓の中にて年一回理事會に於て定めたる日程の觀覽券一枚を配付するものとす

第十一條　總會は一ヶ年に一回開會す

但し理事會に於て必要と認むる場合は臨時會を開く事あるべし

文樂人形淨瑠璃擁護會理事

伊原青々園　安部豐
石川木舟　佐藤義亮
近松秋江　結城禮一郎
和田英作　三宅周太郎
山崎紫紅

（イロハ順）

事務所

東京市小石川區原町三十一

文樂人形淨瑠璃擁護會

振替口座東京四九八一一番

觀劇おぼえ

昭和七年五月　日

菅原傳授手習鑑に就いて		
三勇士名譽肉彈に就いて		
近江源氏先陣館に就いて		

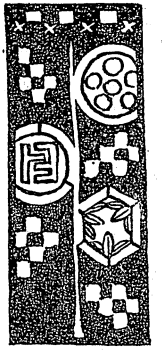
傾城反魂香に就いて		
梅川忠兵衛冥途の飛脚に就いて		

備考

御客樣方へ特に御願ひ

◇お場席へ御携帶品をお置きのまゝお立ちになりますと紛失の恐れが御座いますから、何卒お持ちになるか或は御携帶品預り所へお預け下さるやうお願ひ致します。

◇お履物はなるべくお靴かお草履が御便利です下足預り所が混雜致しますので



人形淨瑠璃について

黑衣子

文樂といへば人形淨瑠璃、人形淨瑠璃と云へば文樂、と斯うした現今の實情は、と云ひますのが、御案内の義太夫淨瑠璃としては、必ずしも衰へたらず却々盛んなもある現狀といたして少しく淋し過ぎはしますまいか？　と申しますのが、人形淨瑠璃は文樂一座きりなのです。珍重せざるを得ないでは有ませんか？　今にして切に大方の御後援を期したき所以であります。當然保護さるべき藝術日本國の傳統的古典藝術の一つだなど、事々しく今更論らふまでもあるまいかと考へます。

申すまでも無く、淨瑠璃と三味線と、そして人形の三位一體が人形淨瑠璃です。一つも缺くべきでは有りません。三者の合して一體となる渾然、全く呼吸一つ、間一つで、卽くかと思へば離れ離れるかと見れば卽く、境や妙絶であります。歷史の果實、歷代名人琢磨の賜物です。

三者の關係の緊密なる、例の「千本櫻」の鮨屋、梶原と權太の件りで梶原が「コリヤ權太」といふ所で、何うしても三味線の手に間が開く、それを何うするか？「何ぢや」と返辭するのが權太を遣つてゐる人形遣ひ、物言ふべからざる人形の遣手が之をいふので、何うしても然うしなければ成らないのだといふ　理外の理？　誠に面白い事實で、そして如何に其間の至難しいものなるかの之は一例だと云ふので有ります。

更に此人形遣ひ、あの三人遣ひに就いて見ますと、先づ主たる遣手が左手を人形の背中から胴に差し込んで人形の位置を定め、同時に右手を以て人形の右手を動かして居り、別に左遣ひといふのが人形の左手をつかひ、又別の足遣ひと云ふのが人形の足だけを遣つて

居るのださうで、玆でも亦三位一體、別々の三ッの頭腦から出る三ッの神經が、それこそ凝つて一個の人形の、固より一つの魂と成らなければならないので、それには三人共に其人形の頭を頼るのださうで、即ち第一の遣手は背中から左遣ひは左から、又足遣ひは下の方から、と總ては神經を其頭に集める。そして更に足遣ひの左腕は人形遣手の腰に接觸してゐて其處に神經の傳達がある、といふのが其腰の動きに付れて人形の足を動かすので、他方左遣ひは絶へず其人形の眼の行く方へと心を付ける。と云つた樣な具合なものださうで、その至難しさは推して知るべきで有ります。

斯くて人形は生きます。生きて浮世の義理と人情とに泣き、そこに妖しの妙なる小さな世界を作るのです。

さて然らば人形の種類は、といひますと、「文七」といふ頭があつて之は光秀、五右衞門、貞任、熊谷などに用ひられ、「孔明」と云ふのは由良之助、菅丞相などに成り「團七」と呼ぶ頭は宗任や權太また「源太」は重次郎、三浦之助八幡太郎、義經などの役に用ひられ、殊に後者は眉が動くので動きの權太とも云はれるのださうであります、と違つて前に云へる「孔明」は眼は眠りますが眉は動かず所謂ベラボウ眉毛といふ描眉毛でありますとか。それから勝頼や忠兵衞に成るのが「若男」で師直、梶原（鮨屋の）、太郎左衞門（大塔宮）などの役をするのが丸目のしゆと（舅？）」、續いて「ふけをやま」は操、相模、千代等の役を、又「娘」は八重、初菊、時姫、しのぶ等の役を、又「新造」は阿古屋、夕霧、宮城野、梅ヶ枝等のおやま傾城の役を受持つのださうです。次に「婆々」は頭は同じものを其あたま（かつら）だけ取替へて夫々の役に用ひるのださうで、唯別に帶屋、一つ家等に出る怖ろしい婆々に限つて特に眼が丸くできて居りますものとか、即ち二種に

成る譯であります。それで同じ「源太」の頭でも重次郎が手負に成る前と後とでは異つたものを用ふ、と云ふ譯で、この一役でも數種の「源太」の頭を必要するのださうです。（春陽堂發行石割松太郎氏著人形芝居雜話に據る。）

それはさて措き、前にも云ふ現今では人形淨瑠璃の別名のやうに成つてゐる此文樂座の發祥は、と申しますと今を距る百餘年の昔、大阪は高津區に櫓を起した所にあり、爾來幾變遷、或ひは別に彦六座を生じた事等もありますが例の御靈から極最近現在の四つ橋に至ります迄、唯一の傳統に、を吐いて來て居るのであります。そして其開始者は實に淡路國の人植村文樂其人だつたので有ります

そも〳〵此淡路國と申しますのが人形淨瑠璃の盛んな土地で、衰へたりと雖も今尚其幾座かを殘して時に貴賤を娛ませて居ります實狀は、彼の谷崎氏の小說「蓼喰ふ蟲」にも見るがやうに面白く描寫されて居ります。然り人形淨瑠璃は此鳴門を起えた千鳥鳴く淡路國の鄕土藝術とも云ふべきで有ります。世俗に傀儡舞し、卽ち人形舞しの祖と云はれて居ります例の攝州は西の宮の百太夫か、傀儡を舞しつゝ諸國を廻つて、後殁つたのが實にこの淡路國で、そこに後を襲ふものがあつて此道がまこと旺んに成つたと傳へられて居るのでありますが、果してそれは何時頃の事であつたでせうか？

約一千年前の古書「和名抄」に傀儡の文字は既にあり、續いて匡房の「傀儡子記」には傀儡子の輪廓を傳へて男は狩を表業に、木偶や土偶を舞した遊牧の民だと云ふて居るのであります。之等の記錄から推して前いふ百太夫の後が淡路に榮えたなどの說話も其大凡の時代など〻共に大分受入れられやうかとも思ひます。何れにせよ平安朝以來長い傳統の此傀儡舞しは、遙かの後に渡來した三味線が多分加はり、又粗末ながらも淨瑠璃といふものが出來て、そ

こで京都の目貫屋長三郎が西の宮から人形遣ひを誘ひ出して、畏くも時の御陽成帝の叡覽に供した。と傳へられますが、即ち彼の慶長頃、德川の初め頃の事であります。そして面白い事は其人形遣ひが西の宮の人間で、その受領して掾號を淡路といふ事であります。

即ち此西の宮が又百太夫以來淡路と共に人形舞しに、關係の深い土地に成つて居ります事は、尙江戸人形淨瑠璃の初めなる薩摩淨雲の人形遣ひが淡路の人間であり、其他「傀儡師は人形まはしの事なり、でくどつといふ、淡路島といふ所より毎年正月にきたりしよし（訓蒙圖彙大成）」等あると共に、「百太夫の祠は――西の宮傀儡師の始祖なり（畵證錄）」とか或ひは「寛延、寶曆の頃まで西の宮より傀儡師來りしに今は絶えて見ず當時首かけ芝居など其類なるべしとあり（樂屋圖繪拾遺）」とかあるにも知られる譯であります。

閑話休題、前述慶長中忽ちにして京にては四條五條、或は江戸の葺屋町とかに櫓が立つて、人形淨瑠璃は一勢に盛つたもので、從つて其人形なども先ず石井飛彈の人形をはじめ竹田のからくり人形、野呂松ののろ人形、次郎三郎のおやま人形、といふ具合に漸次發達して、愈々元祿時代に成ると大阪へ例の竹本義太夫が現れて竹本座をはじめ、同時に近松翁が出て其流派の爲に、人形淨瑠璃に最も適切な名淨瑠璃を澤山書卸し又人形遣ひも辰松八郎兵衞といふ名人が出て評判を採つたのであります。そこへ他方豐竹座の出來るあり、結局西と東と大阪では太夫、三味線、作者、人形遣ひと競爭的に繁昌を來し、從つて其進歩にも頗る眼覺ましいものが有つたのであります。即ち道具立から人形衣裳總て美々しく、舞臺の工夫から又人形遣ひの出遣ひにつゞいて今は太夫の出語りやら、例へば人形その物にしましてからが先づ眼が動き、指先が動き、享保の末には竹本座の與勘平、彌勘平が其腹を

ふくらますと云つた譯、現在の三人遣ひも實に此時に始まるといふ話であります。即ち今日吉田姓を名乘る人形遣ひの元祖に當る吉田文三郎其人で、既に享保のはじめに夙く同じ竹本座に於いて「國姓爺後日合戰」の初出勤に、錦舍の出遣ひに片手の晴業を示したといふ名人であります。つゞいて元文の豐竹座「武烈天皇纖」の佐手彦の眉が動くとか、人形の進歩に伴れて舞臺の工夫なども盛んを極め、從つて歌舞伎にさかんに眞似られると云つた譯、一例すれば彼の「夏祭」の人形に初めて帷子の衣裳を着せたとか或ひは其時遣つた一寸女房おたつに桔梗の帷子黑繻子の前帶淺黃の綿帽子を着けさせたとかの如き、今も尙歌舞伎の眞似てゐる所、事實此時代には歌舞伎はすつかり人形に押されて居たので有ります。

江戸とても之と同じく、慶長の昔各派の人形淨瑠璃が繁昌して居たりしを、一旦大阪の義太夫に依る人形淨瑠璃が入いつて來てからと云ふものは、又漸次其勢力範圍と成りおはり、歌舞伎は矢張之を眞似ると云つた有樣だつたと申します。

事實歌舞伎と此人形淨瑠璃と、互みに眞似をし影響し合ひ、其發達に見て不可分離、一にして二、二にして一と云つた程の緊密さを持つて來て居るので有ります。

そして之等人形淨瑠璃の全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以後に成ると漸次本場大阪でも、亦江戸の方でも其勢力は今度は歌舞伎の方に奪はれて、結局あの大阪は新興北堀江座さへも大した事には成らなかつたと見るべきであります。然し此間にあつても人形は其一箇に所謂黑坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他引拔早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたのでありますが、人形淨瑠璃としては其後は盛んならぬ各座の起伏消長といふ事に成つて居り、遂に前いふ文樂座のみとは成つたといふ次第であります

菅原傳授手習鑑

車場の段

松王丸　豐竹つばめ太夫
梅王丸　竹本南部太夫
櫻丸　竹本文太夫
虎王丸　竹本津の子太夫
時平　竹本鏡太夫

野澤吉彌

菅原傳授手習鑑

車場の段

此淨瑠璃は延享三年八月の、竹本座初演に初まつたもので有ります。

作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳等の合作でありまして、當時竹本座の衰運挽回の爲に、作者等は天滿宮へ祈願をこめ、必死の覺悟のもとに各自分擔書卸したのが此の作なので有ります。

果然、好評で翌年三月まで打續け、竹本座を再び隆盛にしました因緣深い狂言で有ります。

殊に興味を覺へさせられますのは「骨肉の別れ」と云ふ同じ題の下に、各作者持場を定めて筆を執つた事で有りまして、即ち「道明寺（相丞名殘の段）」は松、洛、佐太村（櫻丸切腹の段）」は千柳、「寺子屋（松王首實檢の段）」は出雲と三人の作者が腕比べをしたとの逸話が殘されてゐるので有ります。』

尙、此曲は全五段物で有りまして「傳授の段」「八蜘の鷄の段」「道明寺の段」「車曳の段」「佐太村の段」「飛梅の段」「寺子屋」の以上から成り立つて居るもので有ります。

床本

鳥の子の巢にはなれ魚陸に上るとは浪人の身の喩へ種、菅相丞の舍人梅王丸、主君流罪なされて

車場の段

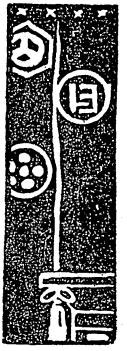
松王丸　吉田玉松
梅王丸　吉田玉幸
櫻丸　桐竹紋十郎
虎王丸　桐竹紋司
時平　桐竹門造

より都の事共取賭ひ、御台のお行方尋ねんと、笠深々と深緑土手の並木に差しかれば、向ふからも深編笠、我に違はぬ其出立、互ひにそれぞと近く寄り梅王丸か、コレハ〳〵櫻丸、ヤレそちに逢ひたかつた、マア咄す事聞く事ありと兄弟木蔭に笠傾け、扨先問ふ其方は日外加茂堤より姫宮君の御後したひ尋ね行きしと、内寶八重の物語、何とお二方に尋ね逢うたか、成程道にて追付奉り、菅相丞御流罪と聞くより對面なさしめ奉らんと安居の岸迄御供せしに御對面叶はず、輝國殿の計ひにて、御歸洛願ひの妨げとお二人の御縁も切られ、姫君は土師の里伯母君の方へ御出、齋世の宮様は法皇の御所へ供奉し奉り事治りしといひながら、納らぬは我身の上、冥加に叶ひ御車を引く其有難い事打わすれ、賤しい身にて戀の取持、終には御身の怨となり、宮御謀叛と讒言の種拵へ御恩請たる菅相丞様流罪にならせ給ひしも、皆此の櫻丸がなす業と思へば胸くはり裂如くけふや切腹、あすや命を捨てふかと思ひ詰はつめたれど、佐太に在する一人の親人、今年七十の賀を祝ひ、兄弟三人嫁三人並べて見ると當春より悦び勇みおはするに、我一人缺るならば不忠の上に不孝の罪せめて、御祝議祝うた上と詮なき命今日までも、ながら

へる面目なさ推量あれ梅王と拳を握り齒をくひしめ、先非を悔たる其有様、梅王も道理と暫し詞もなかりしが、オヽ道理々々我とても主君流罪に逢ひ給ふ上は、都に止まる筈なけれど、御館汝落後御台様のお行方しれず、先づ此方を尋ねふか筑紫の配所に行かふかと、取つつ置いつ心はやれど其方が云ふ如く、年寄つた親人の七十の賀の祝ひも此月、これも心にかかる故思はず延引に思ひは須彌大海、ぜひもなき世の有様と、兄弟顔を見合はせて涙催す折柄に、鐵棒引いて先拂ひ先退いて片寄れと、雜式がいかつ聲、梅王立寄どなたぞと尋れば、本院の左大臣時平公吉田への御參籠出しやばつて鐵棒喰ふなと、いひ捨てて急ぎ行く。何と聞いたか櫻丸齋世の宮菅相丞を憂目に逢せし時平の大臣存分いはふぢや有るまいか、成程々々、よい所で出つくはしたと兄弟道の左右に別れ尻引つからげ身がまへし今や來ると。

程なく轟く車の音、商人旅人も道をそよぎる時平の大臣が路次の行粧さながら、君の御幸の如く、隨身青侍前後に列し、大路せばしと輾らせたり、兩人こかげを飛び出で車やらぬ〳〵と立ふさがる。ヤア何者なれば狼籍する、見れば松王が兄弟梅王櫻丸、ム、聞こへた。主に放れ扶持に放れ氣が違うての狼籍か、但は又此車時平公と知つてとめたかしらひでとめたか返答次第用捨はせぬと、白張の袖まくり上つかみひしがん其勢、梅王丸ゐい笑ひヘーヘハーハヘ、ヽヽハヽヽヽヽヤアいふな〳〵氣も違はねば此車見違へもせぬ、時平の大臣齋世親王菅相丞ざん言に依つて御沈落、其無念骨髓に徹し、出會所が百年目と思ひもうけし今日只今、櫻丸と此梅王牛に手なれし牛追付位自慢でくしひ肥た時平公のしりこぶら、二つ三つ五六百くらはさねば堪忍ならぬ、云はれぬ主のかた持顔出しやばつて怪我ひろぐな、ヤア法に過ぎた案外者、アレぶちのめせ引くくれ

と、供の侍聲々に、前後左右に追取卷、兄弟事ともせず取つては投げ退つかんではぶち付け〳〵投げ付れば、あたりに近づくものもなし、ヤア命知らずのあばれ者、いずれもおかまひ有な御主人の目通り御奉公は此時節、兄弟と一つでない忠義の働きお目にかけん、コリヤやい松王が引きかけた此事、とめらろるならとめて見よやいと、鼻づら取つて引出す車、ホヽウ櫻丸梅王丸ここになくばいざ知らず、一寸なりとやつてみよヤイ、車の内ゆるぐと見えしが現はれ出たる時平の大臣、ヤア牛扶持くらふ青蠅奴等、轅にとまつて邪魔ひろがば、轍にかけて敷殺せ、ヤア左いう大臣を敷殺さんと碎けし轅を銘々提げ、大臣を打たんとふり上ぐる、ヤア時平に向ひ推參なりとくわつと睨みし眼の光、大千世界の千日月、一度に照すが如くにて、遏の梅王櫻丸思はず後へたぢたぢ五體すくんで働かず無念々々とばかりなり、何と我君の御威勢見たか、此上に手向ひすると御目通りで一討と、刀の柄に手をかくれば、ヤア松王待て〳〵、雁金巾子の冠を着すれば大君同然、太政大臣となつて天下の政を執行ふ、時平が眼前血をあへすは社前の穢れ、助けにくい奴なれ共下郎に似合松王が働き、忠義にめんじて助けてくれる、ハレ命冥加のうぢ蟲めら、ウヽアハウヽアハ〳〵〳〵〳〵アイヽヽヽと邊を睨んですすみ行、ふり返つて松王丸、よい兄弟を持つて兩人共に仕合せ者、命を拾うた有難い忝ないと三拜せよと、いはれて兩人くわつとせき上ヱヽおのれにも云分有れ共親人の、七十の賀祝儀すむまでナウ梅王、オヽ其上では松の枝々切折つてかたきの根をたち葉を枯さん、オヽそれは此松王も親父の賀を祝うた後で梅も櫻も落花微ぢん、足許の明るい中早く去れ〳〵ヤア推參な歸るをおのれにならはふかとつめ寄り〳〵兄弟三人互ひに殘す意趣遺恨、にらんで左右へ別れ行く。



吃又平名筆の段

島太夫改め　豐竹呂太夫
鶴澤叶
ツレ　豐澤團伊三

人形

土佐將監　桐竹門造
將監奥方　吉田玉七
吃又平　吉田玉松
女房おとく　桐竹紋十郎
雅樂之助　吉田玉幸
修理之助　吉田文作

傾城反魂香

吃又平名筆の段

是は近松門左衞門作の「傾城反魂香」の改作でありまして、寶暦二年三月大阪竹本座に上場されました「名筆傾城鑑」の四段目の切で有ります。

作者は吉田冠子、中邑聞助、三好松洛の三人で有りまして、全篇は、第一遣羽子の段、第二松の段、第三硯の段、第四吃の段、第五使者の段、第六大津繪の段、第七道行思ひの赤前垂の段、第八大門口の段、第九相の山の段、第十繪文の段、第十一赦免の段、第十二反魂香の段、切が「かけらうの道行」の十二段から成立つて居るので有ります。

大體の筋は、狩野四郎次郎元信が土佐將監光信の娘で有ります遊女遠山の亡魂と、契りを結ぶのを山としまして、是に名古屋山三、不破伴左衞門の廓の達引、光信の門弟吃の又平の活動などを取合はせまして、脚色されたものであります。

其の中でも、此の吃又の件だけは尙今日に於きましても、歌舞伎劇で屢々上場されまして、御好評を博してゐるものであります。

又、此の淨瑠璃の藍本で有ります大近松作の「傾城反魂香」を、明和板の「外題年鑑」では、寶永二年八月の上場として有りますが、寶永五

年は、狩野元信の百五十回忌で有りまして、此の他にも元信に關しました種々な記念的催しが有りましたので、大近松も、それらを當てこみまして、此の作をものしたものと考へられます。

其の爲にか、其章中にありましても、又これらを匂はしたやうな文句が諸所に見られるので有ります。

（床本）吃又平名筆の段

爰に土佐の末弟、浮世又平重起と云ふ繪師あり、生れ付いて口吃り、言舌明かならざる上、家まづしくて身代は、薄き紙子の火燧箱、朝夕の煙さへ、一度を二度に追分や、大津の外れに店借して、妻は繪の具夫は畫く。筆の軸さへ細もとで、上り下りの旅人の、童騙の土産もの、三錢五錢の商ひに、命も錢もつなぎしが、日蔭の師匠を重んじて、半道あまりを夫婦づれ、夜な〳〵見舞ふぞ殊勝なる、夫はなまなか明禮ばかり、女房傍から通詞して、ハァ、是はおよりませぬか、誠にめつきりと暖に日も長うなりまして、世間は花見の遊山のと、ざは〳〵〳〵致しまする。此方は山蔭、御浪人のおつれ〴〵をいさめのため、嫁菜のひたしに豆腐の煮しめ、ささへでも致しまして、關寺か高觀音へお供して、春めく人でも見せまさうと、女夫申して居りますれど、心で思うたばつかり、道者時分で店は忙がし、洗濯物はつかへる、仕事にははかいかず、日がな一日立ちずくみ、何をするやらのらくらと、急げば廻はる勢多鰻、只今膳所から貫ひまして、練貫水の大津酒、ゆめ〳〵しうございますれ共、此春からお仕合が直つて、鰻の穴から出る樣に御世にお出なされませ、ほんにつべこべと私が云ふ事ばつかり、こちの人の吃と私がしやべりと、入合せたらよい頃な女夫が一組出來ませう、ァ、おはもじやと笑ひける、奥方も御挨拶、よう祝ふてたもつた。今宵は奇妙な事あつて、修理は名字を許され、土佐の光澄と名乘るぞよ、

又平も隨分筆に心をつきや、我名をあぐれば即ち師匠の名も出る道理、ノウお德そやじやないか、まあ〳〵よい所へ酒肴、幸ひ〳〵盃もいただいて、あやかりやいのとありければ、又平時節と女房を先へ押出し、背中を突き、我身も手をつき頭を下げ、訴訟有氣に見えければ、女房お德心得て、誠に道すがら百姓衆の噂を聞き、身は貧なり不具なり、弟弟子に土佐を名乘らせ、兄弟子はうか〳〵と、いつまで浮世又平で、藤の花かたげたお山繪や、艶押へた瓢簞の、ぶら〳〵生きても甲斐なしと、身をもんでの無念がり、尤もとも哀れとも、連添ふ私が心の内、申すも涙がこぼれまする、奥樣までは申せしが、お直の願ひは此時節、今生の思ひで、死しての後の石塔にも、俗名土佐の又平と、御一言のお許は、師匠のお慈悲とばかりにて涙にむせび入ければ、又平も手を合せ、將監を三拜し、疊にくひつき泣いたり、將監不愍さの、倶に心は亂るれど、わざと聲をあららげ、ヤア又しても〳〵叶はぬ願ひ、コリヤよつく聞け、此の將監は、近江の國高島の御家來筋、則ち禁中の繪所、小栗宗丹と筆の爭ひ、其上高島家の重寶雲龍の硯を、宗丹達て所望す、イヤきやつに持たせじ我にたべと、互に意地を云ひつのり、ついに御前のお聞きに立て、某は勘當受けて此浪人住居、今でも小栗に從へば富貴の身と榮ふれども、一人の娘おみつに傾城を勤めさせ、子を賣つて食ふ程の貧苦を凌ぐは何故ぞ、土佐の名字を惜むにあらずや、修理之助は只今大功あり、そちには何の功がある、琴棋書畫はは れの藝、貴人高位の御座近く參るは畫人、物を得云はぬ身を以て及ばぬ願ひ、似合うたやうに大津繪畫いて世を渡れ、茶でも呑んで立歸れと、あいそうもなく叱られて、お德ははつと力を落し、コレ又平殿、こなたを吃に生み付けた、親御を恨みさつしやれと、頼みなく〳〵又平も、我咽ぶえをかきむしり、

口に手を入れ、舌をつめつて泣けるは、理みえて不愍なる、折節表に人音して、將監殿やおはする、光信殿と呼はり〳〵拔刀、簀戸押開きずつと入る、將監目早く、お身は狩野の弟子歌之助ならずや、姫君を御供せしか何と〳〵、されば〳〵、館の騷動云ふに及ばず、存知の如く姫君の御供仕り、漸々切ぬけ爰かしこに忍びしが、主人四郎次郎行方知れず、是第一の氣遣と、心迷ふ其内に、敵手ひどく追つくる、シヤ任せて置けと、眞向に太刀指かざし、向ふ敵の腕骨足骨嫌ひなく、四角八方に切散せしが、敵は大勢こなたは一人、難なく姫君奪ひとられ、下の醍醐は雲谷が館なり、伴左衛門を始めとして門を固めて寄付けず、刀の刄金續かんまでと、駈入らんとせしが、イヤ〳〵〳〵、主人の身の上心元なし、跡を慕うて尋ぬる所存姫君御事は將監殿、宜しく賴み存ずると、詞も足も血氣の若者、跡を慕ふて走り行く、將監心も心ならず、サア〳〵我爲の一大事、義賢卿の御賴は爰の事、某が勘當御赦時なきは、いてふの前の何時隱も置し迄けとの御惠み、さあれば我直に向はんこともなりがたし、如何がはせんと思案顏、奥方も氣遣はしく、イヤ〳〵せいては事の仕損じあらん、殊に其伴左衛門姫君に心をかけ、無體に口說くと聞く上は、お命には氣遣ひなし、どうぞ辯舌のよき人に、將軍家の御意とたばかり、取かへす分別はござらぬかと、云ふに將監實にまことせく事はない、何れも云ふておみやれと、額に小皺頬杖つき、各々小首傾くる、又平何ぞ云ひたげに、妻の袖ひき背中つき、指さしすれ共合點ゆかず、しんきをわかし女房を引退けてつつと出で、師匠の前に諸手をつき、唾を呑込み、コヽヽ此討手には、セヽ拙者が參り、姫君をウヽ奪ひト、取つて歸りましよ、將監屹と見、や、面倒な吃め、思案半に邪魔入るぞ、立つてうせぬかと、叱られてもおじるにこそ、イヤ膝ともダヽ

談合と申す、口こそ不自由なれ、心も腕も天下に恐い者がない、拙者が分別致し、叶はぬ時はゑんせう助定あつちへやるか、コヽこつちへ取るか、首がけの心、博奕、命の相場が一分五厘、浮世又平と名乗つては、親もない身がら一身、命は掃溜の芥、名は須彌山とつりがへ、悴の時から奮功なし、命にかへて申上ぐるも師匠の名字を繼ぎたいばつかり、拙者めを道はされて下さりませ、申し、申し、さり迚は御承引ないか、吃でなくば斯うはなるまい、エヽエヽ〳〵恨めしい咽ぶえを、かき破つてのけたい女房共、さりとはつれないお師匠ぢやと、聲をあげて泣るたる、將監猶も聞入れなく、畸人の癖の述懷、涙、不吉千萬、相手になつて果しなし、これ〳〵修理之助御邊向つて、思案を廻らし、奪ひ返し來られよ、早く〳〵、畏つたと刀提げ、立出る、又平むづと抱き止め、マヽマヽン待つて呉れ、師匠こそつれなくとも弟子兄弟の情ぢや、コヽ此又平をやつてくれ、殿とも云はぬ、スヽスヽ、修理様、コリヤ又平、某矢竹に思ふても、師の命は力なし、爰を放せ、イヽイヽヤハヽハ放しやせぬ、放さねば拔いて突くぞ、ッ突け、コヽヽヽ殺せ、ハッハヽヽヽ、放しやせぬぞ、修理之助も持扱ひ、放せ〳〵と捻合ふたり、將監夫婦も氣をあせり、放せ〳〵ととどむれども、耳にも更に聞入ず、女房お德縋りつき、あれお師匠様の御意があるおとましの氣ちがひやと、もぎ放せば女房を取つて投げ、踏み付け〳〵ぢだんだ踏み、ナヽヽヽ何ぢや、已迄がキヽキ氣ちがひとは、エヽ女房さえ侮るか、畸人は何の因果ぞやと、どうと座を組み疊を打つて、聲を惜まず歎きける、心ぞ思ひやられたる、將監重ねて、汝よく合點せよ、繪の道の功によつて、土佐の名字を繼いでこそ、手柄とも云ふべけれ、武道の功に繪師の名字讓るべき仔細なし、ならぬ〳〵と云ひ切れば、女房ばつと居直りて、サア又平

殿、覺悟さつしやれ、今生の望は切れたぞや、此庭の手水鉢を、石塔と定めこなたの繪像を書き止め、此場で自害し其後の、贈號を待つばかりと、硯引寄せ墨すれば、又平點き筆を染め、石面に指向ひ、是生涯の名殘りの繪姿は苔に朽るとも、名は石魂に止まれと、我姿を我筆の念力や徹しけん、厚さ尺餘の御影石、裏へ通つて筆の勢、墨も消えず兩方より、一度に書いたる如くなり、將監大いに驚き入り、異國の王羲之趙子昂が、石に入り木に入るも、和畫に於て例なし、師に勝つたる畫工ぞや、浮世又平引かへ、土佐の又平光起と名乘る可し、此勢に乘つて姫君を奪ひかへせと有りければ、はつとばかり夫婦が喜び、又平は忝けなしと口吃り、禮より外に涙にくれ、躍り上り飛び上り、嬉し泣こそ道理なれ、將監重ねて、心剛にて心ざし厚けれ共、敵に向つて問答せん事如何あらんとありければ、女房聞きもあへず、常々臺頭の舞を好き、我等諸共つれ脇にて舞はれしが、節のあることは少しも吃りも申さず、サア又平殿悅に、めでとう舞ふて立まいか、オット答へて立上り、古き舞を身の上に、なぞらへてこそ舞ふたりけれ、去程に鎌倉殿、義經の討手を向くべしと武勇の達者をゑらばれし、夫は土佐坊、是は又、土佐の又平光起が、師匠の御恩を報ぜんと、身にも應ぜぬ重荷をば、大津の町や追分の、繪に塗る胡粉安けれど、名は千金の繪師の家、今墨色を上げにけり、かくて女房いさみを付け、又もや御意の變る可き、早御立とすすめける、オ、いしくも申されたり、身こそ墨繪のさんする男、紙表具の體なりとも、朽て朽せぬ金砂子、極彩色に劣らじと、勇みすすみし勢ひは、由々し、頼もし我ながら、適れ繪筆の健氣さよ、唐繪の樊噲張良を、栖についたと思し召、イザお暇と起出る將監庭に飛んで下り、待々兩人、吉左右の別餞せんと刀拔間も見せばこそ、又平が像を畫きし手水鉢、一

つにどうと切破つたり、一座の人々呆れ顔、女房お德恟りし、コレ申し將監樣、大事の門出命つく、身を祝ふての舞諷ひ、何がお氣に入りませぬ、又平殿を二つになされしは、不吉を願ふお心か、但し狂氣遊ばしたか、ホ、ウ疑はしくば云ひ聞かさん、昔都誓願寺の御佛は、賢聞子芥子國と云ひし人、親子名乘りの其しるし、片形作り合せし御佛なりしに、然るに此佛體、朝暮兩眼より御涙頻なりしに、時の名醫是を考へ、五臟を作り込んだる佛體なれば、正しく肝の臟の損じならんと、二つに分けて是を直せば、忽ち涙止りし事、今の世までも割符の彌陀と隱れなし

此理を以て又平が魂込めし此繪姿、繪は吃らねど吃るは舌、舌は元より心の臟、其心の臟調はざる故口吃る、今石面の又平を二つに切破る此將監、繪師の手の內中々思ひよらねども、コレ此刀は主人より給はる名作、其名作の奇特を以て、心の臟を斷ち切つたれば、吃る事はよもあらじと、云ふに又平頭を下げ、ハ、、、、有難し有難し、いよ〳〵首尾よく姫君の、御供申し立歸らんと、詞すずしき一言に、奧方始め人々も、二度恟りに又平は、我でに我口疑はしく、らりるれろ、まみむめも、さしすせそ、かきくけこ、ありや〳〵直つた〳〵、云ふは〳〵何を云ふ

狸百匹棒百本、天王寺のたうとう念佛十申せば佛になる誓願寺の佛の誓ひ、師匠の御恩を頭に戴き、どう〳〵〳〵力足踏む又平は、今ぞ出世の金願、あつぱれ諸人の畫本ぞと、勇みいさんでいそぎゆく。

× × × × × ×

和田兵衛秀盛
上使の段
竹本大隅太夫
鶴澤道八

佐々木盛綱
首實驗の段
竹本津太夫
鶴澤綱造

近江源氏先陣館

和和兵衛上使の段
盛綱首實驗の段

此の淨瑠璃は明和六年十二月の竹本座に於きまして、始めて演ぜられましたもので、作者は近松半二、八民平七、三好松洛、竹本三郎兵衛で有ります。

筋立ては鎌倉三代記と同じ趣向から出來てゐるもので有りまして、鎌倉の世界を借りて大阪陣を脚色したもので有ります。即ち人名地名も三代記と同じで、頼家は秀頼、守治の方は淀の方、片岡造酒頭は片桐且元、佐々木盛綱は眞田信幸、高綱は幸村、小四郎は大助、和田兵衛は後藤又兵衛、三浦之助は木村長門守、時姫は千姫、時政は家康と云ふ風になつて居るので有ります。

尚、此の淨瑠璃は全部で九段ありますが、此度演じます和田兵衛上使の段は八つ目の口、盛綱館は同く切となつてゐるので有ります。

（床本）

和田兵衛上使の段

其源は近江路のひゑ山下し、隔てられ便り片田の雁たへて、武士の義は石山や、月の弓張矢叫びの失橋の歸帆陣幕も、ひらめく比良の陣館、小三郎が初陣の手柄初めと父の悦び、妻の早瀬老母の微妙、軍の安否聞までは心赦さぬ持刀、

人形

和田兵衛秀盛　吉田玉松
佐々木盛綱　吉田榮三
妻早瀬　吉田小兵吉
妻籠火　桐竹政龜
母微妙　吉田文五郎
佐々木小四郎　桐竹紋司
佐々木小三郎　吉田文二郎
北條時政　桐竹門造
古郡新左衛門　吉田玉德
榛谷十郎　吉田覺三郎
注進　吉田玉市
二度の注進　吉田玉幸
竹の下孫八　吉田兵次

腰元共も鉢卷しめ、追々告る高名噂めでたい〳〵わこ様がけふの手柄の一番帳、同じ初陣、同じ年の小四郎を、生捕賜ふは、大の男を仕留たより、遙に譽と口々、傍から早瀨が嬉しさ、申しお聞なされたか、ほんそ孫の小三郎、是からは猶はゝ様のあまやかしが思ひやらるゝ、さりながらひよんな事は、其手柄の相手が他人なればよけれど、やつぱりお前の孫の小四郎嬉しいと悲しいと片身がはりのお心を、思ひやつてといふを打けし、嫁女そりやはゝへの充言か、尤も孫の名あれど、不所存な伜佐々木高綱、音信不通の中に出來た小四郎とやら、終に顏見た事もなし、よしは不便に思へばとて、かう敵味方と別れた上、我も源藏義秀といふ弓取を夫に持、盛綱を產だ母、涙かけてよいものか、そんな事言ひ出してもくださるな、シテ兵衛盛綱孫の小三郎まだ歸館召されぬか、ハイお二人ながらお具足をお袴に召しかへられ、道より直に石山の御陣所へ御出仕遊ばしたその注進、定めてきつい御褒美とざゞめき渡る程もなく、立歸る佐々木兵衛、小三郎盛清諸人の尊敬身の面目、社杵衣服も花やかに自然と威を持つ其後にむざんやな小四郎は高手にしむるいましめ繩、雜兵に取卷かれ、羽がい叶はぬしよげ鳥の、顏見初めの孫か共、

いふに言れずおもぢしの別れし我子高綱に、似たと思へば不便さを嫁の手前とまぎらせど、胸つぼらしう形かたち、見まいと思へど目にかゝる血筋の因果ぞせん方なき、兵衛盛綱謹んで、伜小三郎初陣の手初め、是成る繩付生け捕しこと、誰々よりも目ざす大敵、佐々木四郎左衛門が伜、擒とせしは味方の強味、抜群の高名と時政御感斜ならず、御悦びの盃を下され手づから感狀を下し賜はる、御前に並居る諸大名凡そ子を持つ程の人羨まぬ者もなく、子息の武勇にあやかる爲、そこへも盃、爰へも頂戴と、もてはやさるる親の面目、それ故退出も遲なはる、首尾殘る方もなし、お悦び下されと語る中より、早瀨がうきく、何と御らふじましたか、かはいそふに軍の供したがるものを、足手まどひじや留守しておれと、呵り付て鎌倉に殘してお出なされたれど、今度の軍にはづれたら、生ては居ぬとせがみにせがまれせうことなし、いつそはゝ樣三人連、後追ふて來た時にも、さんくに呵られたが、けふの手柄を見た時は、よふ連れて來たと私が自慢、出かしやつたくく產だ母まで俄に肩がいかつて來た、わこ樣お手柄くと譽そやしたるかしましさ、微妙も俱々出かしたと、いさんで見てもどこやらに、濟ぬは胸の汐ざかい、分兼ることそ道理なれ、小三郎手をつかへ、分て君の御諚には、囚人の小四郎首討つ事必ず無用、いつ迄も助け置こそ味方の計略、縛はそのまゝにて隨分大切に仕れとの御事なり、ノウ小四郎殿、こなたとは從弟同士、初陣の軍に仕負、嘸無念にござらふと、言れて小四郎顏振りあげ、とと樣の兼ての敎へ、勝つも負るも軍のならひ、まさかの時に逃るのが侍の恥辱じやげな、生どられても恥とは思はぬ、早首切て下されと、目をふさいだる立派さは誠に父が子なりけり、物見の侍罷り出、和田兵衛秀盛と名乘り、盛綱公に見參致さんと、供廻り僅一兩人にて通り候と訴ふ

れば、ハテ心得ぬ敵方の侍、大將かるゝしく來るは一物、ソレ囚人奥へとり逃すな、皆退けて追立やり、さはがず座席取片づけ、衣紋繕ひ出迎ふ、甲冑の姿引かへて長袴踏しだき、伊達拵への太小もさしも無骨の荒くれ男、目禮式禮悠々と上座にどつかと押直り、扨々此度の合戰、佐々木三郎斯申す和田兵衛、火水の勝負をけつせんと牙を嚙で相待所に、鎌倉の優長武士一日寄ては二日見合せにらみあふて日を送る中、此方はほつと退屈、それ故今日は具足も取置、太平の姿、坂本の城より使者に參つた、ハア〳〵是は〳〵、名にしあふ和田兵衛殿、能々大切の義なればこそお使者の趣、逐一に仰せ聞けられと有ければ、イヤ別義でござらぬ、今朝高綱構にて其手へ生捕れし小四郎高重ちと此方に入用なれば、只今おかへし下されとの使なりと、事もなげに述べければ、ハ・・・是は存じの外の御事何ぞや一人の童づれに侍大將の自身馬をむけられしは珍說珍說、あの小倅一人がなければ合戰も得なされぬか、何故に左程の懇望事おかしふ存ずると、あざ笑へば、實尤も、併此方に不審なるは、其童の小四郎を貴殿の子息が生捕しを一城をも乘取しがごとく悅びいさみ、鎌倉方の勝軍の基なりと籤をたゝき、勝鬨を作つて引れしは是いかに、左程鎌倉方に懇望せらるゝ小四郎故、此方にも惜く存じ、ぜひ所望に參つたり、其代りには少分ながら此和田兵衛が髭首進上申す、お望みならば手柄次第に、隨分取て御覽なされと、むづと座したる不敵の顏色、盛綱打笑み、扨々弟ながら高綱は、大功の勇士と思ひしに倅にまよふ未練の性根、そこを察して傍輩の好み命を救ふ情けのお使者、あれしきの小兒いかやう共と申したけれど、生捕の帳にしるした上は時政公より預りの囚人、盛綱私には渡されず、ならば踏込ばい取て歸られよ、其座は一寸も立せじと反打つて詰かくれば、マヽおせきな

されな貴殿と拙者、只今爰で差違へては敵味方によき大將、二人を失ひどちらも兩損、よし〳〵御邊の儘にならぬ囚人、此上は石山の陣に參り、時政殿に直談して自他共所望致して歸らん、盛綱さらばと立上り、廣庭におり立は、チヽそりや兎も角も勝手次第、さあらは石山へ御案内申させん、ヤアヤア誰か有と詞の下、小貝足かためし覺への力者、ばら〳〵と取卷たり、ハテ仰山な案内者、敵の陣所へのふ〳〵と一人參る和田兵衞、不知案内の無骨者萬事よろしう氣づかひあるな、ワレ必ず大將の御座近くナ、お引あはせ申すならば大事の珍客隨分御酒を合點か、イヤ御酒とはかたじけない、我等別して大好物、御馳走ならば湖もかへまして御目にかけふ、おさかなの飛道具鑓長刀の串ざかな、何本なりと賞翫いたす、盛綱殿おさらば、和田殿御苦勞案内大儀と長袴、虎を放してやる勇氣、火焔の中へ行大膽、心の具足鐵石の石山さして出て行く。

（床本）盛綱陣屋の段

盛綱は只茫然と、軍慮を帷幕の打傾き、思案の扇がらりと捨て、母人それにおはするかと、音なふ聲に立出る、陣屋のくま〳〵跡先見廻し、母の膝にすり寄つて、親の役目を子が勤るは順なれ共、御老體の母人に、御叱勞お頼申さねば叶はぬ事、申さぬ先から心得たと有る、御誓言承りたしと、事有げなる願ひの品、聞かねど遺佐々木の後室打うなづき、親子の中に改めて、頼むと有るはよく〳〵の事ならめ、仔細はしらねど心得ました、ハッア早速の御承知忝し、お頼の仔細と申すは、最前の囚人、拙者が爲には甥、母人の爲には孫の小四郎を、今宵の中に母のお手にかけられてと、聞きもあえずコレ〳〵盛綱、最前我君よりの仰渡され、必ず小四郎に過ちさすな、殺すなとの御諚ならずや、サア其殺すなと御諚故に、猶以て殺さにやならぬ、辯舌を以て人を懷

る北條殿、小四郎を殺すなとの
諚意は、生置て人質とし、子を餌
に飼ふて、佐々木四郎左衛門高綱
を、味方に付ん謀、鏡にかけて
顯はれたり、中々心を變ずべき、
弟高綱とは思はね共、いかなる
大丈夫も我子の愛には迷ふならず
ひ、萬一此謀に陷つて、降參など
の心付かば、子故に不忠の名を流
さん事殘念至極、よしさはなく共
小四郎が擒と成つて息有る中は、
恩愛と云ふ大敵に、高綱が弓勢も
弱り、双金も自然となまる道理、
迷ひの種の此小四郎、一時も早
く殺して仕舞へば、弟が義心猶々
鐵石、是ぞ兄弟弓矢の情と有て
我手にかくる時は、主君北條の命
に背く、稚心に此理を辨へ、自身
に切腹するならば、我は油斷の誤
り計り、兄が義も立ち、双方全き
此役目は、御苦勞乍ら母人、密に
小四郎に腹切らせて下されかし、
現在の甥の命、申宥めて助るこ
そ、情共いふべきけれ、殺すを却
て情とは、情なの武士の有樣や、
いかなれば、兄弟敵味方と引別れ、
今朝の矢合せに敵は甥なり、味
方は我子、肉身と肉身の、劍を合
はす血潮の瀧、修羅の巷の攻太鼓、
胸に磐石こたゆるつらさ、弓馬の
家に生れし不甲聞分てたべ母人
と、事をわけたる物がたり、母は
手を打ち尤、尤。兄のそなた
も、弟の高綱も、我子に依怙はな
けれ共、隔て居る程不便もまさ
り、有やうはそなたにも、心を置
いて居ましたが、弟に不忠の悪名
を、付けさすまいと左程まで、心
づかひの深切、オヽ忝いぞや嬉
しいぞや、世の喩へにも、少の虫
を殺して大功を立る事、眞實眞身
は子よりも可愛い孫なれ共、思ひ
切つて切腹させう、オヽお出かし
なされた、健氣者とは見ゆれ共、
稚き小四郎、若小腕に切損なはゞ、
母人宜しう御介錯、早短日の暮近
し、佐々木兄弟が苗氏を穢すか、
名を上ぐるか、二つのさかい涙ば
しかけたまふな、氣遣ひめさんな
おくれはせぬ、必ず氣强う遊ばせ
と、わたす一腰受取腰のはり弓に、

詞つがふて別れ入る。峰吹通す風に、早園城寺の鐘諸共、誘はれ來るが羽の矢、紅葉のしげみに射込しは、主を誰共人目せく、陣笠まぶかに篝火が、男出立の半弓に、やはか仇にはかへらじと、陣屋間近く慕ひ寄り、和田殿の供廻りに紛れ込み、爰迄は忍び入たれど、用心堅き陣屋の木戸口、心を通はす矢文の謎、小四郎が目にかゝれかし、祝ひ祝はふた初陣に、いまはしい縄目の恥、外の手でも有事か、從弟同士の小三郎、憎てらしい手柄顔、甥を縛らせ伯父の身で、それが本意か怨しい、どうして居るぞ只一目、見たい逢ひたい間の戸に、我身も祥と楯板も、通すは涙の矢數なり、もれてや奥に聲高く、侍中々々夜廻り怠り申されなと、女の聲も敵の中、胸驚かれ篝火は、差足乍ら忍び行く、障子さつと目早の早瀬、紅葉の矢文拔取て、つくづくながめ扨こそ扨こそ羽響もなき忍びの矢、女業と推量に違はぬ手跡、狀の文體にも非ず、名にしおはゞ逢坂山のさねかずら、人にしられてくるよしもかな、と古歌を書しは、ム、〳〵手は見しらねど相嫁の篝火、囚れの小四郎に、此陣屋を拔出で、人しらずくるよしもがな、爰は所も近江路や、世に逢坂の關の戸を、明て逢んとしらせの謎、エ、侍の母の樣にもない、未練なさもしい、軍に立てば討死は覺悟の前と、立派な小四郎に惡氣を付、若取逃しやなどしたら、其不調法は誰にかゝる、一家の好は生捕つて、命に別條ない樣子、知せて安堵さす程に、必ず爰らに狼狽て、親子一所の縄目を受け、夫の名迄よごしやんなと、恨の裏の反古文、打返したる返事の古歌、矢立の硯さらさらと、書認めてくゝり付、内にも人目重藤の、弓打つがひ陣外の、小松にひやうと手ごたへと、俱に立切る障子の内、稚心に油斷せぬ、縄付ながら小四郎は、そつと一間を忍び出、今おば樣の讀しやつた、矢文の手は母樣、爰を拔けて戻れとの、知せは聞いても敵の中、見

とがめられては恥のはぢ、とはいへ母様どこにござる、死共ちよつと、顔見たやと、そろり〳〵と拔足も、危き毒蛇の陣の口、あはや跡より窺ふ微妙、小四郎待やと聲に恟り、アヽイ、どこへもいきやいたしませぬ、御赦されてと計にて、わな〳〵ふるふ有樣を、つく〴〵見れば見るにつけ、同じ佐々木の血筋でも、扨て果報の拙い子や、囚人の身と成たれど、子心にも氣おくれして、身すぼらしい顏形、今宵限りの命とは、云はねど虫が知らすかと、思へばそゞろ先立涙、胸に押さげ撫おろし、ヤレ孫よ爰へおぢや、そなたのばゞぢやはいの、器量骨柄揃ふた子に、いたいたしい此繩目、といてそなたに此ばゝが、云ひ聞かす事有りと、立寄りほどく血筋の繩、子ゆゑに引れ篝火が、又立戻る陣屋のまへ、矢文の返事は嫂の早瀨の手跡、行も歸るも別れては、しるもしらぬも逢坂の、關とは時節を待との事か、いかにと見やる戸の透間、微妙は孫の手を引て、一間の障子押開き、ノウ小四郎、高綱に別れてから、十三年の年月、孫ありとは聞いた計り、なつかしさ逢ひたさは、膝元で育つた小三郎より、顏見ぬそなたの不便さは百倍、殊更長の、浪人の貧しい中に育てられ武具迄も嘸不自由に、口惜しう暮しつらんと、思ひやる程片時も、忘る、隙はなけれ共、思ふに任せぬ敵味方、此上下はばゞがそなたへ引出物、著てたもやいのと差出せば、何心なく押戴き、取上て不審顏、申しばゞ樣、此上下にはなぜ紋がござりませぬ、九寸五分が添へてあるは、高名手柄せよと有る、首搔刀でも有るまい、こりや私に腹切れとの、死裝束でござりますなと、悟る利發に驚く篝火、微妙はがばと泣倒し、暫し詞もなかりしが、オ、退は親の子程有る、人に勝れて其樣に、聞分よい程助たさは、胸一ぱいにせまれ共、殺さにやどうもならぬといふは、父親の高綱が、武勇智謀の勝れたが、そなたの身の仇敵、

助けよと有る北條殿は、子を人質に高綱を、降參さする謀とそれまでは殺しもせず、まして助けて歸しもせず、いつ迄も陣中に、捕へて置との主命、生きて居る程、高綱が武勇の妨、爰の道理を聞分て、潔う腹切てたも、エ、見れば見る程目付なら鼻筋なら、眉に一つの黑子迄父親に此似やう、智惠才覺迄違はぬ物生先も見ずむざ〳〵と、蕾の花をちらすかと、老の繰言涙の齦、もれて外面に聞嫁の、何ば道理は道理でも、餘り氣づよいお袋様、我子は殺さぬ〳〵と、延上れ共芦垣の隔つる中ぞ是非もなき、母の心通じてや、小四郎おとなしく手をつかへ、私が命一つで、とゝ様や伯父様の手柄に成事なら、私が一つの願ひ、昨日の軍の初陣に、直ぐ敵へ生捕れ、此儘死るは弓矢神の冥加にも盡たかと、何ぼう悲しい口惜い、どうぞ最一度お歸しなされ、ととゝ様かゝ様にたつた一目逢た上、せめて雜兵の首一つ取つて立派に死で見せませう、此お願ひを、ア、是のう賢い様でも遺は子供、預りの因人敵へ歸して、盛綱が武士が立つ物かとやかゝに逢はされる程なれば此憂目はないはいの、とはいふ物の逢ひたいは道理ぢやはいの、尤もぢや、世が世の時なら二人の孫、右と左と月花と並べて置て、老の樂み、此上も有まいに、生捕るも孫、捕れるも孫、小三郎が手柄したとて仰立つる眞中へ、縛れて引出されし、顏見た時のばゞが胸は、張裂様に有しぞや、迚も甲斐ない其方の運、最後が末練に有つたなどと、口の端にかけられては、親高綱が矢弓の名折れ、尋常に死んでたも、や、介錯は此のばゞ、可愛孫を先立て、いつ迄因果の恥さらさうぞ、ばゞも直ぐに自害して、三途の川を手を引て、渡るはいのと抱じめ、なく〳〵劔差付れば、只兩親に逢ふ迄は、赦して下さればゞ様と、未練も親子の恩愛に、道理といとゞ目もうろうろ、孫もうろうろ透有らば、逃んと見るや木戸口の、爰にと母の呼

子鳥、ヤアかか樣かと飛立計り、かけ出す孫を引留てせき、立老母の聲あらゝか、エ、未練者卑怯者扨は母親と內通して、髮を拔て出る心ぢやな、それならば猶助られぬ、望の通り一目逢はしたればササ〳〵切腹、但しはわが手にかけうか、サア夫はサア〳〵、何とと脅しに拔けて振上る、劍の下に手を合せ、かゝ樣の聲聞てから一倍命が惜う成つた、どうぞ助けてお情ぢや、堪忍して下さりませ、アレイアレイと逃廻り、おくれる孫に猶氣おくれ、ナレ最前の健氣な覺悟忘れしか、迚も叶はぬ期になつて、臆病者の名を取かや、伯父が見ぬ先自害して、立派と譽られてくれればゞが方から手を合す、賴むといへど、逃まどふ、外にはむごやつれなやと、恨は三方三惡道、前生の敵同志か、いとしかはいの孫や子に、生れて憂目を見するかと、老母がしんみの血の涙、時雨の中の枯紅葉、露より先にちりぬらん、折柄さつと山風の、遙に陣鐘太鼓、事こそあれと早速の早瀨、薙刀かい込走出で、木戸押開けば駈入る篝火、待た待た高綱のおかもじこりやどこへ、知れた事、我子の小四郎取返す、ならぬならぬ、相嫁の初見參薙刀に乘りたいか、イヤ推參なとぎしみあふ、眞中に三郎兵衞、小四郎小脇にひんだかへ、石山の御陣所に事あると覺ゆるぞ、ヤア〳〵小三郎は何處に有る、ハア則只今御加勢と、用意の小具足甲の緒、締たる間遲しとかけ出す、引違へて知らせの軍卒馳參じ、時政公の計略の如く、佐々木四郎左衞門高綱、我子を取られし憤り、今宵自身に馬を出し、手勢漸く、二千餘騎、鎌倉の總大將時政公に直見參仕らんと、死物狂ひの其有樣、鬼神の如く見え候、併し味方は豫ての用意大將の陣は數萬の警固、盛綱公には氣遣ひなく、檎の伜を守護有べしとの御事也、猶追々に御注進と、申捨てぞかけり行く。三郎兵衞太息つぎ、ハ、ア南無三寶しなしたり、さしもぬからぬ弟

高綱、子故の闇に心くらみ、謀に陥つたるな、魔利支天なればとて、數萬騎の其中へ、一騎がけの死軍、討死せん事眼前たり、此上は親の慈悲、佛間で御回向なされかし、盛綱、母人、エ、力なき武運の末、殘念さよと計りにて、眼を閉ぢて奥に入る、篝火猶も氣はそゞろ、我子も氣遣ひ夫もいかが、千々に碎くる軍の破れ、ゐいゐいおうと勝鬨は、敵か味方か二人の妻、胸の陣鐘足も空、二度の注進勇の大音、御悦び候へ、軍は充分味方の勝利、大軍に取圍れ、集り勢の高綱方、途を失ふて逃走るを、或は搦首、或は射取、殘る兵さん〳〵に追まくり、諸葛孔明と呼れたる四郎左衛門高綱を、榛谷十郎が討留て候と、聞より妻はハアはつと、心散亂もへ立つ篝火、夫の首は渡さじと、行くをやらじととゞむる早瀬、大將軍時政公、御成ぞふと呼はる聲、ハアはつと早瀬は大將の、御座の設けと走入る、龍の雲に冲るが如く、一陽の春を待つ平時政、近習の武士古郡新左衛門、佐々木三郎盛清、御供に扈從して御召がへの鎧櫃、御座の次に飾らせて、寛然と入たまへば、三郎兵衛母微妙、敬ひ請じ奉る。竹の下の孫八、慌しく罷り出で、最前和田兵衛秀盛、御陣所へ參りし所、日頃好むる酒をしいて醉はせ、居間の四方に金網をかけたれば、籠の鳥同然と、思ひの外のしれ者、隱し火矢を以て屋根を打拔き、御座の間の白旗を奪ひ取立退て候と、言上すれば時政公、ハ、〳〵敵の軍中へ鎧も着せず只一人、踏込む程の不敵者、汝等が手に合はすべきか、第一の大敵佐々木四郎左衛門を打取たれば、腹心の害は拂ふたり、去乍ら此の佐々木、古への將門に習ひ、一人ならず二人三人の影武者有て、いづれを是と見わけがたし、誠の佐々木か贋首か、弟が首よも見損ずまじ、兄盛綱實檢せよと、仰の下に新左衛門、首桶御前に直し置、三郎兵衛承り、大將に一禮し、無殘の弟が死首に、是非もな

き對面やと、呑込涙後より、父の死顔拜まんと、窺ふ小四郎盛綱が、引明ろ首桶の、一目共見もわかず、と、と樣嘸口惜かろ、わしも跡から追付と、氷の双雪の肌、腹にぐつと突立ろ、ヤレ母人お留なされ、何故の切腹仔細をいへ、樣子はいかにと人々あはて介抱に小四郎きつと目を見開き、何故死ぬとは伯父樣共覺へぬ、卑怯未練もとゝ樣に逢ひたさ、父を先立何をまざ〳〵と生恥を曝さん、親子一所に討死して、武士の自害の手本を見せると、きりゝ〳〵と引廻す、其手に縋り母微妙、ノウ其立派な心をしらす呵つたばゞが面目ない、こらへてたもと右左、目をしばたゝく三郎兵衞、猶豫はいかに早實檢、何と〳〵と御掟意に、疵口拭ひ耳際迄とつくと、改め古實を守り、謹んで兩手に捧げ、矢疵に面體損じたれ共、弟佐々木高綱が首、相違御座なく候と、御前に直して押下れば、ホ、ウ骨肉の兄が實檢と云ひ、首に向つて小四郎が恩愛の涙、切腹の有樣、誠の首の證據明白、思へば昨日は此首に、後を見せし時政が、今手の下に誅罰する、我武運の强き、ハ、ア心地よや嬉しやな、今と云ふ今時政が、初めて枕を安く寢るは盛綱が働き、我が着替の鎧一領、當座の褒美に殘し置く、小三郎其他には陣中にて、勝軍の恩賞せん、皆萬歳を唱へよと、悅喜の粧ひ傍を拂ひ、本陣さして歸陣ある。盛綱あたりをとつくと見廻し、佐々木高綱が妻籌火、計略の贋首仕課たれば、小四郎の最期の暇乞ひ、赦す是へと一言を、聞く間遲しと轉び出で、我子に葬と抱付わつと泣より外ぞなき、なみだながら母微妙、贋首と知つて、大將へ渡したそなたは、京方へ味方する心底か、イ、ヤいつかな心は變ぜねど、高綱夫婦が是程まで仕込んだ計略、父が爲に命を捨る幼少の小四郎が、餘り神妙健氣さに、不忠と知つて大將を欺せしは弟への志、彼が心を察するに、高綱生きて有る內は、鎌倉方に油斷せず一旦討

死せしと僞つて、山奥にも姿を隱し、不意を討んず謀、然れ共底深き北條殿、一應の身替は却々喰ぬ大將、そこを計つて一子小四郎をうま〳〵と此方へ生捕らせしが術の根組、最前の首實檢、饅首を見て父上よと、誠しやかに愁歎の有樣に、大地も見ぬく時政の、眼力をくらませしは敎も敎へたり、覺えも覺えて親子が才智、みすみす饅首とは思へ共、斯程思ひ込だ小四郎に、何と犬死がさせられう、主人を欺く不調法、申譯は腹一つと、極めた覺悟も負ふた子に、敎へられ淺瀨を渡る此佐々木、甥が忠義に比べては伯父が此腹、百千切てもかけ合がたき最期の大功、そちが命は京鎌倉の運定め、出かしたな、出かしたと手負の顏を、打守り〳〵、悲歎の涙にくれければ、篝火いとゞかきくれて、子を賞られる親の身の、悅ぶは常なれど、生きて高名手柄して、今の仰に預らば、何ぼう嬉しかるべきに、年相應より利發なが、生付た此子が因果、いかに武士の習ひじや迚、かうかうして自害せいと、敎へる親の胴慾さ、かはいや初陣の初めから、死に行事合點して、おりや侍の子ぢやによつて、討死するは喜しけれど、死んだらとと樣やかゝ樣に、つひ逢ふ事が成まいかと、夫ばつかりがと言さして、泣顏見せず勇んで行きし其立派さ、天晴弓矢打物迄、誰におとらぬ物覺え、腹切事迄是程に、器用になくば何事ぞ、コレのう小四郎々々と、手負の耳に口差寄せ、此深手ぢやもの、耳も遠なる。目も見えまい、今伯父樣のおつしやつた事聞取やつたか、そなたの命捨たので、高綱殿の忠義が立つと褒美のお詞、夫を未來の引導に、迷はず佛になつてたもと、いひ聞すれば嬉げに、そんならわしが死ぬるので、とゝ樣の軍が勝に成るか、エ、忝い、ばゝ樣はどこにぞ、わしや縛られても卑怯ぢやないぞへ、それで死でも、本望ぢや、伯父樣、伯母樣ばゝ樣にも、かゝ樣にも、逢ふて死ぬのは嬉しいが、たつた

一つ悲しいは、とゝ様に、とゝ様にと、跡は得言はず舌こはばり、次第々々に弱り果、惜や菜の初花も、無常の風にちりて行く、コレのう小四郎孫やい、今はの際に親父を、尋ね死んだ子の心、思ひやつて只一目、なぜ顔見せに來てくれぬ、千騎萬騎の大將にも、成べき物を梅檀の二葉で、枯せし胴慾は、神も佛もなき世かと、歎く微妙の聲限り、涙の早瀬篝火も消る計りの思ひなり、三郎兵衛泣目を拂ひ、ハア歎きに紛れおくれたり、實檢を仕損じたる鎌倉への申譯、母人さらばと、指添に手をかくれば、ヤア〳〵盛綱、和田兵衛秀盛是に在り、敵を見かけて自害とは臆したるかと聲かけられ、シヤ幸ひのよき敵歸らば、其儘かへさんに、運つきたる秀盛、逃しはせじとつゝ立てば、ォ、和田兵衛が習ひ得し、南蠻流の懐鐵砲、受けて見よとどうと打つ、ねらひはそれて鎧櫃、内に忍びし榛谷十郎、太腹射拔かれのた打たり、見よや盛綱、底の底まで疑ひ深き北條の隱し目附、汝が手にかけざれば、不忠にあらず彼めが不運、今又御邊自害せば、鎌倉への義は立べきが、佐々木が首は贋物なりと、忽露顯し、是迄も碎し心は水の泡、時を待つて佐々木高綱、誠に爰にと切て出る其時に、潔く切腹せば、忠立ち義も全うし、腹の切様早い早い、ハゝア實に誤つたり我命、暫く生るは弟へ、是も情の一ツには、甥への寸志追善供養、野送り萬事も一家の内證諸事、何事も此座切り、表は京方鎌倉方、右大臣實朝の白旗奪取しは、軍の吉左右重て再會、留て見ぬかと出て行く、ヤア盛綱が陣中にて、味方の武士を討つたる曲者、返せ戻せは弓矢の儀式、ちなみは兄嫁小姑、孫よ甥子の亡骸に、うき事三井の晩の鐘、消え行く子より親心、我唐崎の夜の雨、父には一目粟津の嵐、木の葉の紅葉かきよせて、夕部を照す勢田の橋、門火は狼煙敵味方、さらばとばかり別れ行く。

淡路町の段

竹本　相生太夫
鶴澤　清二郎

人形

龜屋忠兵衛	吉田　榮三
母妙かん	吉田　玉七
丹波屋八右衛門	桐竹　政龜
手代伊兵衛	吉田　玉市
馬方	吉田　瓢壽呂
山田甚内	吉田　傳之助
宰領	吉田　玉德
下女まん	吉田　光之助

梅川忠兵衛　冥途の飛脚

淡路町の段
新町封印切の段
新口村の段

是は正德元年、竹本座の初演と傳へられて居ります。

大阪淡路町の飛脚宿龜屋の養子忠兵衛が、新町の槌屋の梅川に馴染み金に窮して苦心を重ねます。新町の揚屋で友達の八右衛門が忠兵衛の蔭口を云ふのを聞きまして前後もなく、忠兵衛はさるお屋敷へとどける爲替金の封印を切り、梅川を身請けしましたものの、今日に迫つた身の破滅に、共に逃れて呉れと廓を後にします。

此の新町の段は、土佐太夫の十八番の粹で有ります。

扨、忠兵衛は梅川を連れて、死出の旅路に唯一目と、大和新口村の親里へ立寄りますが、茲にも捕手は迫つて居りまして、苦しい親子の生別、積る因果の雪道を逃れて死出の門に立つ、情炎紅蓮の好箇の世話物で、新口村は古靱太夫の得意のもので取ります。

（床本）

淡路町の段

身をつくし、難波に咲や此花の里は三筋に町の名も佐渡と越後の合の手を通ふ千鳥の淡路町、龜屋の世繼忠兵衛、今年廿のうへはま

だ四年以前に大和より敷金もつて養子分後家妙閑の介抱ゆへ、商ひ巧者駄荷積江戸へも上下三度笠、茶の湯俳諧、碁双六、のべに書くて手の角取つて、酒も三つ四ついつ所紋羽二重も出ずゐらず無地の丸鍔象眼の國細工にはまれ男、色の譯しり里知りて暮るを待ず飛足の飛脚宿のいそがしさ、荷を造るやらほどくやら、手代は帳面、算盤を、奥口ともにどや〳〵と、千萬兩のやりくりもつくし東の取やりも居ながら金の自由さは、一歩小判や白銀に翅の有が如くなり、町廻りの狀取立ち歸つて、それ〳〵と留帳付る所へ誰頼もふ、忠兵衛宿に居やるかと案内するは出入の屋敷の侍、手代共殷懃に、ヤア是は甚内様、忠兵衛は留守なれば、お下しものの御用ならば、私に仰聞られませ、お茶もておじやとおいしらふ、イヤ〳〵下りの用はなし、江戸若旦那より御狀がきた、コレお聞きやれと押開き、來月二日出の三度に、金子三百兩差登せ申べく候、九日十日兩日の内、其地龜屋忠兵衛方より右三百兩受取内々申置候事共埒明け申べく候間金子受取次第此證文忠兵衛に渡し申さるべく候、コレ此通り仰せ下された今日まで届けぬ故、大事の御用の手筈が違ふ、ナゼか様に不埒なと鼻をしかめていひければ、ハ、御尤も〳〵去りながら此中の雨續き川々に水が出ますれば、道中に日が込金の届かぬのみならず、手前も大分の損銀、もし盗賊か切り取か、道からふつと出來心、萬々貫目取れても十八軒の飛脚宿から辨へ、芥子程も御損かけませぬ、お氣遣ひあられなと、言せも果ず、これさ〳〵いふまでもない御損かけては忠兵衛が首が飛ぶ、日限延ては御用の間が明により、それ故の詮索迎ひ飛脚を遣はして早速に持參せいと、かち若い徒も刀の威光、銀拵へもうさんなる、なまりちらして歸りしが、又頼みませふ〳〵、中之島丹波屋八右衛門から來ました、江戸小船町米問屋の爲替銀、添狀は届いたが

銀はナゼ居きませぬ、此中文を進ぜても返事もござらず、使をやらば酢のこんにやくのと、いつ居けさつしやるぞ、此者に渡して人を付て下され手形戻すと申さるゝ、サア金子受取ふと立ちはだかつてわめきける、主思ひの手代の伊兵衛驚がぬ體にて、コレお使ひ、八右衛門様が其やうに理屈くさい口上は有まい、五千兩七千兩、人の金を預つて、百廿里を家にし、江戸大阪を廣ふせほうする龜屋。そこ一軒では有まいし遲ひ事もなふては、今でも旦那歸られたらば此方から返事せふ、五十兩に足ぬ金あたかしましいふまいと、かさから出れば、氣を呑まれ、使ひはましめに歸りけり、母妙閑は炬燵の傍放るゝ事も納戸を出で、ヤア今のは何ぞ、丹波屋の金の届いたは慥か十日も以前の事、ナゼ忠兵衛は渡さぬの、今朝から二軒三軒の、金の催促聞てゐる、親父の代からこの家に一歩の催促得ず、終に仲間へ難儀をかけず、十八軒の飛脚屋の鏡と言れた此龜屋、皆は心も付ぬか忠兵衛が此頃の素振り、どふも呑込ぬ、昨日、今日の者は知まいが、じたい是の實子でなし元は大和新口村、勝木孫右衛門といふ大百姓の一人子、母御ぜはお死にやつて、繼母がゝりのわざくれ（やけ）に、惡性、狂ひも出來るぞと爺御ぜの思案で、是の世取に貰ひしが、世帶廻り商賣事何に愚はなけれ共、此頃はそはそはと何も手に付ぬと見た、異見のしたい事あれど養子の母も繼母も同然と思はふがせは〳〵いふより言はぬ身を恥いらせふと思ふて目をねぶつても聞所、見所は見て居る、いつのまにやら太氣になり、のべの鼻紙二枚三枚、手に當り次第重ねながらに鼻かみやる、過行かれし親父の咄しに、鼻紙びんびと遣ふものは曲者じやと言れたが、忠兵衛が内を出ざまにのべ三折宛入て出て、何程鼻をかむやら戻りには一枚も殘らぬ、身が達者なの、若いのとて、あの様に鼻かんでは、どこぞで病ひも出ませふ

とよまい事して入ければ、丁稚小者も笑止がり、早ふ歸つて下されかしと待つ日も西の戻り足店さし頃に成にけり、籠の鳥なる梅川にこがれて通ふ里雀、忠兵衛はとぼとぼと外の工面、内の首尾、心は蜘手かく繩や十文色も出てくるは、南無三寶日が暮ると、足を空に立歸り、門口に着けれ共留守の内に方々の、催促使妙閑の耳に入てはか様の首尾になつたも氣遣はし、誰ぞ出よかし内證を、とくと聞て入たしと我家ながら敷居高く、内を覗けば飯焚のおまんが酒やへ行體なり、きやつは木で鼻もぎとぶ者、只はいふまじ、濡かけてだまして問んと思案する間ににによいと出る、樽持た手を、しかとしだれば、アレ旦那様のと聲立るア、かしましい、コリヤ粹め、おれが首丈ならんで居る、思ひ内にあれば色外に現はる、目付をそちも見て取たか、かはひらしい顏付で、氣の毒がらすはどふじやいやいいつそ殺せと抱付ば、ム、嘘付んせ、毎日々々新町通ひ、のべ鼻紙二折、三折、結構な鼻をかまんす物、何のわしらに手鼻もかみたふ有まい、アノ嘘つきがと振切るを、又抱付いて。そちに嘘ついて何の德、コリヤ實じや〳〵といひければ、それが定たら晩に寢所へござんすか、ウ、成程〳〵糸いそれに付て今ちよつと問事有と言けれ共、それも寢所でしつぽりと聞きませふ、コレ必ずだましにさんすなへ、そんならわしはお湯わかして腰湯して待ますといひ捨てふつきり、走りけり、忠兵衛は嘘腹の立煩ひて居る所に北の町からいかつげにくるは誰じや、ヤア中之島の八右衛門、きやつにあふてはむつかしと東の方へ出違へば、是忠兵衛はづすまい〳〵と聲かけられ、ヤ八右衛門、此中は久しい昨日も今日も一昨日も、人やろ人やろと思ふて何やかやと延引した、めつきりと寒いが親父の疝氣はばば様の虫齒は、ア、いかふ酒くさい過しやるな〳〵、明日は早々人やらふやれそが言傳したぞ

や近日一座いたしたいとたくしくかくれば八右衛門、ァヽおけやい口三味に乗かけても、乗よふな男でない、コリャそちが商賣は三度でないか、身が方へ登つた江戸爲替の五十兩は何として屆けぬ、五日三日は了簡も有ぞかし、心安いは格別、高駄賃かくからは大事の家職十日に餘れど埒明ずけふも使ひをやつたれば、手代めの倍高な返事した、よもや脇へはそふも有まい、八右衛門をなぶるか、北濱靱中之島は天滿の市の側まで親父共言るゝ八右衛門、なぶつて能くばなぶられふが、金はけふ請取る、但し仲間へこさよふか、先お袋に逢ふと、内へ入を引留め、さりとては誤つた、コレ手を合すつた一言聞てたも、拜むくと嘶けば、又口先で濟そふや、梅川をだましたと男の意氣は違ふぞよ、いふ事有ばサァ聞ふと、苦々しくきめ付られ、コレ其聲を母が聞ば死でも一分立ぬ事、一生の御恩ぞさりとては面目ないとはらはらと泣けるが、何を隱そふ、此金は十日以前に登りしが、知ての通り梅川が田舍客金づくめにて、張合ひかける、此方は母手代の目を忍んで、わづか二百目三百目のへつり金、道倒されて生た心もせぬ所に、受出す談合極つて手を打ぬばかりといふ、川が歎き我らが一分既に心中する筈で、互に咽へ脇差のひいやりとまでしたれ共、死ぬ時節か色々の邪魔ついて、其夜は泣て引別れ、明れば當月十二日そなたへ渡る江戸金がふらりと登るをなにがなしに、懷に押込で新町までいつさんに、どふ飛だやら、覺へばこそ、段々宿を賴んで田舍客の談合やぶらせ、こつちへ、根引の談合しめ、彼五十兩手附に、渡し、まんまと川を取りとめしも八右衛門といふ男を友達に持し故と、心の中では朝晩に北に向ひて拜むぞや、さりながらいかに懇なればとて、先に斷り立置て、遣へば借も同然、後ではいかゞと思ふ内、其方からは催促、嘘に嘘が重なつて、初手の誠も虚言となれ

ば、今何を言ても誠には思はれじされ共遅ふて四五日中外の金も登る筈、一時損かけまじ、此忠兵衛を人と思へば腹も立つ、犬の命を助けたと思ふて了簡頼み入る、是を思へば世の中にお仕置者の絶ぬも道理、此上は忠兵衛も盗みせふより外はなし、男の口からかやうの事言れふものか推量有れ、咽より剣をはくとても、是程には有まじと、しぼり泣にぞ泣居たる、鬼共組ん八右衛門、ほろりつと涙ぐみ、言憎い事よふ言た、丹波屋八右衛門男ぢや了簡して、待てやる首尾よふせよと言ければ、忠兵衛土に額を付け、忝い〳〵、爺二人、母三人親は五人持たれ共、其恩よりは八右衛門、貴殿の御恩は忘れぬと、とかふは涙ばかりなりそふ思へば満足、サア人も見る、其内と立別れんとせし所に、内より母の聲として、ヤア八右衛門様か、忠兵衛是へ通しませうと、聲かけられて、詮方なくもぢ〳〵連立入にけり母は律義一遍に先程はお使ひ、又御自身のお出、御尤も〳〵是あなたの金の屆いたは十日も以前、何として延引ぞ、胸にとつくと手を置て、よふ思案して見や、遅ふ屆けば飛脚は入らぬ、何がそなたの商賣で、サ、今渡して上げましやと、いへ共渡す金はなし、八右よりも底意は聞く、やは是お袋、恥かしながら八右衛門、五十兩や七十兩急に入る事なし、是より直に長堀まで參れば明日でもと立んとすれば、いや〳〵大事のお金預かれば氣遣ひで夜も寢られず、ノウ忠兵衛、きり〳〵渡しやとせり立られ、あつといふより納戸に入り、うろ〳〵しても金はなし、入もせぬ戸棚の錠、明ける顔してぴんといふ鍵の手前も恥かしく、胸に願立て、神おろし狂氣の如く氣をもみしが。ヤレ有難や此櫛箱に燒物のびん水入れ、是氏神と三度戴き紙押ひろげ、くるくるとするが包みに手ばしかく、金五十兩墨黒々に似せも似せたり五十ぱい、母には一ぱい參らせし、其惡智恵で勿體なき、コレ〳〵八

右衛門殿今渡さつても濟金ながら、母の心休める爲、男を立つるそなたと見て、詮方のふて渡す金さつぱりと受取て母の心を休めてたも、包みは解にも及ぶまじ、いらふて見ても五十兩、どふしてたもると差出す、八右衛門手に取て、ハテ誰ぞと思ふ、丹波屋の八右衛門受取に仔細はない、コレお袋、江戸爲替慥に受取ました、不動參りに待ますと、立所を妙閑誠と思ひてや、是忠兵衛仕切爲替の作法は金と手形と引かへ、もし御持參なきならば、一筆ちよつと書せましや、物は念じやといひければ、チ、それ〳〵母は無筆の一文字は讀ね共、しるしばかりに一筆と硯出して目配せすれば、安い事〳〵忠兵衛文言是見やと筆に任せて書きちらす、一つ金子五十兩受取申さず候、右約束の通り晩には廓で呑みかけ、我らは幇間、實正明白也、何時なり共騷ぎの節きつりと參上申すべく候、依て紋日の爲、びん水入れ件の如しと、あほうのたら〳〵書ちらし、さらばお暇申そふと、表へ出れば妙閑は、書たものこそものいへと、又欺されし正直の親の心や佛の顏も、三度飛脚の江戸の左右待夜も漸く更にけり、表に馬の鈴の音、コリヤ〳〵駄荷が付たぞ、中戸〳〵と聲高にてん手につゞらかたげこむ、忠兵衛親子機嫌よく、サア拍子が直つた來年も仕合せ、馬、馬士衆に酒よ、煙草よと、硯控へつ帳つけて家内どんどゝ賑はへば、手代の伊兵衛けふとげに、ノウ狀の登つた何とて、おそいとお侍の甚内殿がねめつけて歸られた。何と〳〵といひければさいりやう打がいより其三百兩合點、これ急々の御用、今夜中にお屆け方々の爲替金高八百兩ぐはら〳〵と取出す忠兵衛いよ〳〵勢ひに强く白銀は内藏へ、金子は戸棚へ母者人わたしは直に此小判、お屋敷へ持參する、人の銀子を預れば表も氣を付け早ふしめ、火の用心が第一、戻はちつと遲ふても駕で行ば氣づかひない、夜食仕舞て早寢よと、金懷中

新町封印切の段

切　竹本土佐太夫
　　野澤吉兵衛

人形

傾城梅川　吉田文五郎
傾城鳴戸勢　吉田玉米
傾城瀬戸勢　桐竹紋太郎
丹波屋八右衛門　桐竹政龜
龜屋忠兵衛　吉田榮三
井筒屋女房　吉田玉七
禿　梅里　桐竹紋司
仲居りん　吉田萬次郎
仲居たま　吉田覺三郎
太皷持五兵衛　吉田兵次

に羽織の紐、結ぶ、霜夜の門の口、出馴し足のくせになり、心は北へ行く〳〵と思ひながらも身は南、西横堀をうか〳〵と、氣にしみ付し米が事、米屋町まで歩み來て、ヤア是はしたり堂島のお屋敷へ行筈、狐が化すか南無三寶と引返しが、ム、我知ず爰まで來たは、梅川が用有て氏神のお誘ひ、ちよつと寄て顔見てからと立歸つては、イヤ大事、此金持ては遣ひたからふ、おいてくれふか、往てのけふか、エ行もせいも、一度は思案二度は不思案、三度飛脚戻れば合せて六道の迷途の飛脚と。

（床本）新町封印切の段

ゑひ〳〵〳〵烏がな烏がな、うはき烏が、月夜も闇も、首尾を求めてな、あをふ〳〵とさ、青編笠の、紅葉して、炭火ほのめく夕アまで思ひ〳〵の戀風や、戀と哀は種ひとつ梅かんばしく松高き位はよしや引しめて哀深きは見せ女郎、さらさ禿がしるべして、橋がかけたや佐渡屋町、越後は女主として、立寄よねも氣兼せず、底意殘さぬ戀の淵、身の浮しほで梅川も爰を思ひの定宿と、餘所の勤も柿の本島屋をちよつと島がくれ、申し、きよ樣けふは、島屋で彼田舍のうてずに、せびらかされて、つふりかいたい、忠樣はまだ見へぬかへ、せめての由緣にこなさんの

顔が見たさにかしに來たと、入さの門の障子戸も明るあしたの筐かや、扨もよふござんした、ァレ二階にも女郎さん達が大勢遊びにござんした、お客待間のささめ言、けんをしてござんするこなさんも氣晴らしに一けんして酒一つ、傍輩さんもござんすと、上る二階の透間風、男まぜずの火鉢酒、けんの手品の手もた聞く、六ま七さい、とうらい三な、同じ事とよ豐川に聲の高瀬かさすらひなにはばま三きう五六すむゐ、それ〳〵なんとじたひ一つはなるとせさま、あれ梅川樣のござんした、なふよい所へ來て下んした、こなさん、けんの上手宵から千歳樣に、しつけられて、無念な敵取つて下さんせ銚子直しやといひければ、ァゝうたての酒や、けんをする氣も有ばこそ、此梅川が今の身を少しは泣て貰ひたい、田舍の客が身請の事けふもけふとて島屋にて、理屈を詰てねだれ事、腹が立やら憎いやら、とは言ながら、是は先、忠兵衞樣は後手と言ひ宿の精力一つにて、手付も渡し約束の日切きれにも言延し、けふまではつながれしが忠樣もせたい持、養子の母御の手前といひ、屋敷方歴々の町方を引受て東路かけての大事な商賣、いかなる事が邪魔になる、田舍の客に請られては、我身一つは死でものけふ、天神太夫の身でもなしさもしい金に氣がふれた見世女郎の淺間しさと、世間のとなへ傍輩のかもん殿を始めとして、格子女郎衆の手前もあり、忠樣と本意を遂げ、とやかふ人に諷はれし、面がぬぎたふござんすと、泣しみづきて語るにぞ、一座の女郎身の上に思ひ合せて尤もと、連て涙を流せしが、ァゝいかふ氣がめいる、わつさりと淨瑠璃にせまいか、禿共ちよつと往て、竹本頼母樣かつておじや、イヤ先にびん附買とて聞きましたが芝居から直に越後町の扇屋へいかんしたげな、私は頼母樣の弟子なれば、よふ似た所を聞かんせ、サア三味線と、夕霧のむかしを今に引かけて、傾城に誠

なしと世の人の申せ共、それはみないが事、譯しらずの詞ぞや、誠も嘘も元一つ、たとへば命投打いかに誠を盡しても男の方より便なくとふざかる其時は、心やたけに思ひても、かふした身なれば儘ならず、おのづから、思はぬ花の根引に合、かけし誓も嘘となり、又初より僞りの勤ばかりに逢人もたへず、重ぬる色衣、ついのよるべと、なる時は初の嘘も皆誠とかく只戀路には僞りもなく誠もなし、縁の有のが誠ぞや、逢事叶はぬ男をば思ひ〳〵て、思ひがつもり、思ひさめにもさむるもの、つらや所在と恨むらん、恨まばうらめいとしいといふ此病勤する身の持病かと、戀に浮世を投首の酒も、しらけてさめにけり、中の島の八右衛門九軒の方より淨瑠璃聞付け、ヤウ皆知つたよねの聲々、花車内にかとつゝと入る、柄差箒逆手に取二階の下から板敷をくはた〳〵と突き鳴し、女郎衆餘りじやは、爰にも人が聞てゐる、いかなる男で、それ程に戀しいぞ、男がなふて淋しくば、お氣には入らずと是にも一人借てやろかとわめきける、梅川はそれ共しらず、テモ逢たいが定じやもの、憎いなら來て叩んせ、きよ樣下なは誰樣じや、イヤ大事ござんせぬ、中の島の八樣と聞より梅川はつとして、是々あの樣には逢ともない、皆樣ずつと下さんせ、私が二階に居る事を必ず〳〵言まいぞ、そこらは粋ぢやと打默頭き皆々、座敷に出ければ、ヤア千代とせ樣なるとせ樣、歴々の御參會梅川殿は宵の口島屋を貰ふていなれたげな、忠兵衛もまだ見へそもない、コレ花車爰へ寄しやれ、女郎衆も禿共も、忠兵衛が事に付、耳打つて置事があるる爰へ〳〵とひそ〳〵すれば、ハア何事やら氣遣ひなと、思へど二階の梅川に惡い噂も聞かせてかと皆氣を配る折ふしに、忠兵衛は世を忍ぶ心の氷三百兩、身も懷もいゆる夜に越後屋に走り付き内を覗けば八右衛門横座をしめて、我評判はつと驚き立聞す、二階には梅川

が心をすますと壁に耳もるるぞ仇の初めなる、斯と知らねば八右衛門コレかふいへば忠兵衛を憎みそねむ様なれど、あの男が身のなる果が可愛、尤も千兩二千兩、人の金をことづかり暫しの宿を貸れ共、手金といふては家屋敷家在かけて十五貫目、廿貫目に足ぬ身代、大和の親が長者でも、龜屋へ養子にこすからは、モ高の知れた百姓、かふいふ此八右衛門も若い者の習ひ、一年に五百目壹貫目を揚屋の座敷も踏ねばならぬ、身にも應ぜぬ忠兵衛が梅川に登り詰、島屋の客と張合、九月より此方の揚つめ身請も此頃極り、百六十兩の内五十兩手附渡したげな、それ故に方々の屆け金が不埒になり、當る所か嘘八百いかふ鐺が詰つて來た、今でも梅川が請け出さるゝに極らば、借錢も有ふし、泣ても二百五十兩天から降ふか、地からわかふか、盗せふよ外はない。彼手附の五十兩どこから出たと思し召す、身が方へ來る江戸爲替宙で取て遣ふたを、それ共知らず、乞に行く養子の母御がアヽいとしほや、登つた金は知て成渡せ〳〵とせつがれて、忠兵衛が戻した小判ドレお目にかけふかと一包み取出し、コレかふ見た所は五十兩、さらば正體現はして獄門の種御覽有と、包を切て切りほどけば燒物の鬢水入主も一座の女郎もハアヽとばかりにこはげ立ち身をちゞむれば、二階には顏を疊に摺付けて、聲を隱して泣居たり、短氣は損氣の忠兵衛、傾城は苦界物、五十兩の目くさり金取かへたせんしやら、若い者に恥かゝせ、川が聞たら死たから、懐の三百兩、五十兩引拔いて頬へぶち付け存分言、我身の一分川が面目、すゝいでやらふ、アヽ、されば共是は武士の金、殊に急用、爰が大事の堪忍と手を懐へ幾度かとやせんかくやしやうげ鳥いすかの觜の喰違ふ、心も知らぬぞ是非ひなき、八右衛門水入れ取上げ、コレ是も買ば十八文いかに相場が安いとて、五十兩を貳分五厘かへ神武以來ない事、友達さへ足なれ

ば、他人をかたるは御推量、此次段々に巾着切りから家尻切り、果は首切、ヤモいかにしても笑止な、あの如くに亂れては、主親の勘當も、釋迦達磨の意見でも聖德太子が直に教化なされてもいかな〳〵直らぬ曲輪で此沙汰ばつとして寄付ぬ樣に賴みます、梅川殿へも吹込んで此方から挨拶切り、島屋の客にさらりつと、請出させて、仕舞ひたい、皆あの流か心中か、女郎の衣裝を盗むか、ろくな事は出かさず、片鬢剃こぼたれ、大門口にさらされ友達の一分捨さする、人でなしとはあれが事、ヤコレ可愛くば寄付て下さるなと、語るを聞けば、梅川も悲しいと、いとしいと、身のはかなさをかきまぜて胸引さける忍び泣き、ア、又物がな、はさみでも、舌を切ても死たいともだへ伏たる苦しみを、下には各々推量して、ひよんな心にならんしたかたの惡い梅川さま、いとしほいは川さまお一人に留めた、と下女料理人裏若き禿も袖をしぼりけり、忠兵衛元來惡い蟲押へ兼てずんと出、八右衛門か膝にむんずと居かゝり、是丹波屋八右衛門殿常々の口程有て、ヲ、男じや見事じや、三人寄ば公界、忠兵衛が身代の棚おろししてくれる忝ないわい、コリヤ此水入も男同士母の心を休める爲受取てくれるかとなぞをかけて渡したを、此忠兵衛が五十兩損かけふかと氣遣ひさに、曲輪三界披露して、男の一分捨さすのか、但し又島屋の客に賄賂取て、梅川にわらを焚あちらへやらふと言事か置てくれ〳〵年遣ひすな、五十兩や百兩、友達に損かける忠兵衛ではごさらぬ〳〵わいの、八右衛門樣、八右衛門め、サア金渡す手形渡せと、金取り出し包みをとかんとする所を、八右衛門押へてこりや〳〵〳〵待やい忠兵衛、よい程のたはけを盡せ、其心を知つた故、意見をしても聞まじと、曲輪の衆を賴んでこちから、よけて、貰ふたらば、根性も取直し、人間にもならふかと、コリヤ、五十兩がおしければ母者の

前でいふはいやい、てんがうな手形を書き、無筆の母者をなだめたが、是でも八右衛門がとゞかぬか、其金がさも三百兩、手金の有ふ樣もなし、定めてどこぞの仕切金、其金に疵を付け、八右衛門を仕た樣に、ユリヤ鬢水入では濟まいぞと、但し替りに首やるか、登り詰る其手間で屆ける所へ屆けて仕まへ、エ、性根のすはらぬ氣違ひめと、わつつくといつ叱れ共、いやいや〳〵仁義立置てくれ、此金を他所のとは、此忠兵衛が三百兩持つまい物か、女郎衆の前といひ身代を見立てられ、猶かやさねば一分立ぬと、包みほどいて、十廿三十しじう詰らぬ五十兩くるくると引包み、コレ龜屋忠兵衛が人に損をかけぬ證據、サア受取れと投付る、エ、男の頰へ何とするぞへ、忝いと禮いふて返し直せと投戻す、俺に何の禮いはふと、又投付つ投かへし、腕まくりしてぎしみ合ふ、梅川涙にくれながら楷子かけをり、なふすつかりわしが聞きました。皆島八樣のがお道理じや、是々是手を合はせる。梅川に赦して下さんせ、と聲を上て泣きけるが、情けなや忠兵衛樣なぜ其樣に登らんす、そもや曲輪へくる人の例持余る長者でも金につまるは有ならひ、爰の恥は恥ならず、何を當に人の金封を切てまきちらし、詮議にあふて牢樞の繩かゝるのと、いふ恥とかへらるか恥かへばかり梅川は何となれといふ事ぞとつくと心を落し付、八樣に詫言し金をつかねて其主へ早ふ屆けて下さんせ、わしを人手にやりともない、それは此身も同じ事、身一つ捨ると思ふたら皆胸に込て居る年とてもマア二年宮島へも身をしきり、大阪の濱に立つてもこな樣一人は養ふて男に憂目はかけまいもの、氣を鎭めてくださんせ、淺間しい氣にならんした、わしがした皆梅川が故なれば、忝いやらいとしいやら、心を推して下さんせと、くどき立〳〵小判の上にはら〳〵と涙は井出の山吹に露置きそふが如くなり、忠兵衛氣も有頂

天前後くくらぬ間にあい莚、式金の事思ひ出し、ハテやかましい、此忠兵衛をそれ程たはけと思やるか、此金は氣遣ひない、八右衛門も知て居る、養子に來る時大和から敷金に持て來て、他所へ預て置た金、身請けの爲に取戻した、コレ花車爰へと呼寄せ先へ手付に五十兩、今百十兩合せて百六十兩、是川が身の代、是又四十五兩いつぞやしめた帳面買がゝりの借錢五兩は遣手、九月からの揚錢萬事十五兩程と覺へたが、算用がやかましい廿兩で帳消や、此の十兩はこなたへ御祝儀やら、骨折分、りんも玉も、五兵衛も、一兩宛じや、こいこいと金銀ふこす邯鄲の夢の間の榮耀なり、サア今の間に埒明け今宵中に出る樣に、賴むく〳〵と言ければ主じ俄に勇をなしない程はないも金ある段には有ものかは、氣を死そふ事ではない川樣嬉しう思はんしよ、ヤ大事の金を持て行く、りんも玉も供しやと引連走り出にけり、八右衛門も濟ぬ顏、誠とは思はね共、たゞさへ貰ふ此小判、かやすものをいはれぬぢぎ、五十兩慥かに受取た、手形かやすと投出し、梅川殿へ、よい男持てお仕合せ、よね樣達是にと金懷中し出ければ、わしらもいざ歸りましよ、川樣目出たふござんすと、皆宿々へぞ歸りける。忠兵衛は氣をせいて花車は、なぜおそいぞ、五兵衛いつてせいてくれと立に立つてせきければ、イヤ身請の衆は親方が濟でから宿老殿で判を消し、月行司から札取らねば大門が出られませぬ、まちつと障が入ませふ。そこらを早ふこりや賴むと、又一兩投出す、おつとまかせと足かろく走る三里の灸よりも小判の利ぞこたへける、サア〳〵此間の身拵へ、べた〳〵した取なり、鼻もきり、と仕なをしやとめつたにせけば、盃事、暇乞も譯よふして、ゆるりと出して下さんせと、何心なく勇顏、男わつと泣出し、いとしや何にも知らずか、今の小判は堂島のお屋敷の急用金、此金をちちうしては身の大

新口村の段

中竹本淀路太夫
豐澤團伊三
切豐竹古靱太夫
鶴澤清六

人形

龜屋忠兵衛　吉田榮三
傾城梅川　吉田文五郎
忠三女房　吉田扇太郎

事は知れた事、隨分こらへて見つれ共、友女郎の眞中で可愛男が恥辱を取、そなたの心の無念さを、晴したいと思ふより、ふつと、金に手をかけて、もふ引れぬは思の役、斯なる因果と思ふてたも、八右衛門が頻付直に母にぬかす顏、十八軒の仲間から詮議に來るは今の事、地獄の上の一足飛、とんでたもやとばかりにて、縋り付て泣ければ梅川はつと振ひ出し聲も涙もわな〳〵と、それ見さんせ、常々にいいしは爰のこと、なぜに命が惜いぞ、一人死ぬれば本望、今とて安い事、分別すへて下さんせ、なふ、ヤレ命生ふと思ふて、此大事がなるものか、生らるゝだけ添るゝだけ高は死ると覺悟しや、アヽそふじや、生らるゝだけ此世で添はふ、アヽほんに忘れた、わしが大事の守りを内の箪笥に置て來た。是がほしいと言ければ、ハテかゝる惡事を仕出かして、いかなる守りの力にも此科が遁れふか、とかく死身と合點して、我はそなたの回向せん、そなたは此忠兵衛が回向を賴むと泣ければ、梅川ひしと抱き付、むせかへつてぞ歎きける、越後主從立歸り、サア〳〵何處もかも埒明た。お出の勝手、近ければ西口へ札が廻つたといへ共、夫婦はわな〳〵と、さらば〳〵もふるひ聲、お寒そふなが酒はいの、酒も咽喉が通りませぬ、

順　　禮　　吉田覺三郎
木綿買儀兵衛　　吉田利男
樋口水右衛門　　吉田瓢壽呂
傳がばば　　桐竹紋太郎
針立の道庵　　吉田文作
置頭巾　　吉田光之助
鶴掛藤治兵衛　　吉田傳之助
捕手小頭　　吉田文之助
親孫右衛門　　吉田玉次郎

めでたいと申そふか、お名殘りおしいと申そふと、千日言ても盡ぬ事、其千日がめいわくと夕告鳥にわかれ行く、榮耀榮華も人の金、果は砂場を打過ぎて後は野となれ大和路や足にまかせて、出て行く。

（床本）

新口村の段

節季候だい〳〵、だい〳〵は節季候、おめでたいは節季候、通らしやれ〳〵、親方衆と違ふて、こちとらは水呑百姓、こなた衆にやる米はないわいのと、つこどに云はれ、こりやいどい、如何樣貰ふ節季候より、内の樣子はせく候と去ぬれば女房は糸ぐるま、正月迄は休まうと、納戸へ取込みおうへの塵、掃出す表へ、てい古手買紙屑、お内儀樣紙屑はないかな、オ、いやな人ぢやわいの、京や大阪と違ふて、在所に紙屑はない物ぢや、勝手しらぬ人ぢやさうな、町へ出て買つしやれ、阿呆な人と笑はれて、つぶやきながら見過し〳〵、歸る程なく同行二人、ふだらくや岸打波は三熊野の、那智のおやまの詮議とは、人目にそれと白木綿、禪衣かけて順禮姿、お嚊樣、火を一つ借つしやりませ、爰は何といふ所かな、爰は大和の新口村、煙草の火は出しませぬ、手の内も法度でござんす、アヽけんどな在所だなと、家内をきよろ

きよろねめ廻し、次の村へと出て行く、ほんに今日程うさんらしい者のたんとくる日はない。納戸這入も成るまい。ドリヤ夕飯のこしらへと、竈の前に差かゝる。落人の、爲かや今は冬がれて、すゞき尾花はなけれ共、世を忍ぶ身の後や前、人目を包む頬かぶり、隱せど色香梅川が、馴ぬ旅路を忠兵衛が、痛はる身さへ雪風に、凍える手先懐に、あたゝめられつ溫めつ石原道を足曳の、大和は爰ぞ古郷の新口村に着きけるが、コレこゝは、わしが生の在所、四五丁行けば實の親孫右衛門殿の所なれど、不通といひ繼母なり、殊に今の身の上を、お目にかけるは大きな不幸、此わらぶきは忠三郎といふて、親達の家來も同然、マア〳〵爰へと門の口、忠三郎内にか、ア、久しう逢ませぬとつゝと這入れば女房は、アゝこちのは今庄屋どのへ、どこからござんして何の用わしや藪際の次郎兵衛後家の媒酌で、近い頃爰へ來た故、前方の近付は知りませぬが、もし大阪の衆ぢやないかいな、こちの親方孫右衛門様の息子殿、大阪へ養子に行つてけいせいとやらいふ物を澤山買ふて、人の金を盗み、其の傾城を手にさげて、走つたとやらすべつたとやらで、代官所からきつい詮議、孫右衛門様は久離切つて、お上の構ひなけれども、血を分けた親子なれば、いとしや年寄つてきつい案じ、こちの人も馴染故、もしこのあたりうろたへて、見付けられはさしやれぬかと、いかい氣苦勞、庄屋殿から呼には來る、ヤ寄合ぢや印判ちやと、節季師走に爰らあたりは、傾せい事でにえかへる、アゝうたての傾せいやとしらねば遠慮もなかりけり、二人はハッと胸に釘、打點頭で成程々大阪でも、其の評判、わしらは女夫づれで、年籠の參宮、懐かしさに寄ましたが、立ながらあふて行きたい大阪者と云ばずに、ちよつと呼んで來て下されぬか、オ、夫は安い事、一かへり行つてきませうが、京のお寺が鎌田村の道場

へお下り、先からすぐに參られたもしれまい。夫ではよつぽどわしが戻りも遲い。コレ女中樣飯がしかけて有る程に、出來損なはぬ樣に、差くべて下さんせやと襷外して出て行く、後は門口はたとしめ繫金かけてうつとりと、暫く詞もなかりしが、コレ忠兵衞樣、ほんに爰は劍の中、斯うして居ても大事ないかへ、ア、いや〳〵、男氣な忠三郎、賴んで今夜は爰に泊り、死ぬる共故鄕の土、生の母の墓所、いつしよにうづまれそなたにも、嫁姑と引合せ、未來の對面さしたいと、おろ〳〵涙梅川もそれは嬉しうござんせう、去ながら、私がとゝ樣かゝ樣は、京の六條珠數屋町、定めて此間詮議に合ふて居さんせう、かゝ樣は弦暈持若もの事は有るまいかと我身のうへより案ぜられ、今一度京の兩親に、一目あふて死たうござんす。オ、道理ぢや〳〵、わしもそなたの親達に、聟ぢやといふて逢もしたし、恩の有る養子親、妙閑樣や言號の、おすはへも不埒の詫、そなたの兄忠兵衞殿の、志も無にした斷り今一度しみ〴〵あひたいと、人目なければなきじやくる。わたしもたんと恩の有る、兄さんが猶戀しいと、互ひに手を取り抱き合ひ、涙のあられはら〳〵と、袖にあまつて窓を打つ、ハア雪が降るさうなと、奥の一間は西受の反古障子を細目に明け、見ゆる野風の畠道、うしろしぶきの雪吹にはかたけて急ぐ阿彌陀傘、道場參りぞつゞきける。ヤレありや皆在所の知つた衆、先なは樋の口の水右衞門、ひどい呑人ぢやぞい、其次は荷持癇の傳が婆、こりや又村一番の茶飲ぢやぞ、こへ入來る置頭巾は大貧乏であつたが、年貢に詰つて娘を京の島原へ賣つてよい客に請出され、金持の奥樣に成つて、聟の蔭で田も五丁、藏も二ケ所の俄分限、同し女郎受出しても わしはそなたの親達に、憂目をかけるが、口惜いわいの、エ、愚痴なモシそんな事云ふて下さんすな〳〵、アノ親仁は眩かけの藤治兵

衛八十八で一升の、飯を殘さぬ達者もの、今年はてうど錢百ぢや、其跡に仔細らしい坊主は、針立の道庵、あいつが針で母者人を立殺した。思へば〳〵親の敵ァ、もうよいわいな、今腹たてゝも何の役に立たぬ事、ァ、ァレ〳〵あそこへ見えるが親父樣、此世のわかれ御暇乞、せめて餘所乍らお顏なりと、拜まうと、はる〳〵と爰迄來た念願が叶ふたか、ァ、有がたい〳〵〳〵〳〵〳〵、あの綟子の肩衣が、孫右衛門樣かいな、ほんに親子は爭そはれぬ。目元から鼻筋から、お前によう似た事わいな、サァ、夫程よう似た親と子が、詞さへも得かはせぬは、何とした身の因果、ァ、お年も寄り足元も弱つて、是が今生のおいとま乞でございますと、手を合すれば梅川は今がお顏の見初めの見納め、私は嫁でござんする。夫婦は今をも知れぬ命、百年の御壽命すぎて後、未來で孝行いたしましよと口の内にて獨言、夫婦諸共手を合せ、兎かく涙にむせび居る。孫右衛門は老足の、休み〳〵門を過ぎ、野口の溝の薄氷、すべるを留る高足駄鼻緒は切れて横樣に、どうと轉べば南無三と、忠兵衛もかけ出られぬ身、梅川あはて走り出で、抱起しつ裾絞り、申し〳〵〳〵、どこもいたみは致しませぬかへ、お年寄のあぶない事、お足も洗ひはな緒もすげて上ませう、マァ〳〵こちへと手を引いて、内に伴ひ揚り口、腰膝撫ていたはれば、孫右衛門は氣の毒さ、ァ、戴きます〳〵、どなたか知らぬが忝ない、お蔭で怪我も致しませなんだ、ァ、若い女中のおやさしい、年寄と思召して、嫁子もならぬ御介抱、もう〳〵手を洗はしやつてくださりませ、幸ひ庭に藁は澤山、鼻緒はわしがすげますと、懷搜して取出す塵紙、ァ申し、爰によい紙がござんす、小搓捻つて上ましよと、延べ紙引さく其手元不思議さうに打守り、此邊りに見馴ぬ女中、マアこな樣は、此樣に、何誰なれば懇ろにして下さりますと、顏つれ

〳〵と眺むれば、梅川いとゞ胸つぼらしく、ハイ私は旅の者、私の舅の親父さま、丁度お前の年配で、恰好も生寫し、外の人にする奉公とは、さらく〳〵もつて存じませぬ、お年寄に舅御の、臥惱みのだきかゝへ、孝行は嫁の役、御用に立つて嬉しい物、さぞ連合は飛立つ樣にござりましよ、其紙と此紙とかへて、私が申し請、連合の肌に付けさせて、爺御に似た親父樣の筐にさせたうござんすと、塵紙袖におし包む、涙にそれとはしられけり、詞の端に孫右衞門、扨はさうかと恩愛の、盡ぬ涙を押隱し、フウ、こなたの舅に、此親父が似たといふこの孝行が、エ嬉しうござるが腹が立ちます、わしも年たけた倅めを、樣子有つて久離切り、大阪へ養子にやつたが、傾城といふ魔がさして、人の金を盗んだとやら、あげくに所を走つた噂、此大和は生國なれば、十七軒の承脚屋仲間、お上からも隱し目付け、或は順禮古手買、節季候に迄身をやつし、此在所は詮議最中、誰故なれば其傾城の嫁御故、近頃愚痴な事なれど、世のたとへにもいふ通り盗する子は憎うなうて、繩かける人が恨めしいとは此こと、久離切つた親子なれば、よからうが惡からうが、構はぬ事とは思へ共、大阪へ養子に行つて、利發で器用で身をもつて、身代もよう仕上げた、あの樣な子を勘當した、親は大きな白痴者と指差せられ笑はれたら、其嬉しさはどう有う、今にもつい、捜し出され繩かゝつて引るゝ時、孫右衞門は目水晶、よう勘當した出かしたと、譽られるのが悲しうござる、それを思へば一日も、早う往生おすくひと拜願ふは今まゐる如來樣、御開山、コレマ佛に嘘がつかれうかと、どうとひれ伏しもだへ泣き、梅川も聲を上げ、忠兵衞は障子より、手先を出し伏拜み、身をもみ歎くぞ道理なる、猶も涙を押拭ひ、樣子聞いたか、聞かぬかしらぬが、子を釣出さうとお上の計らひ、養ひ親の妙閑殿、一昨日牢に入れたげな、

エヽト夫婦は氣もうろ〳〵、それでつく〴〵思ふには實の親を便にして、もしも忍んで來はせまいか、來たらば何ぼう不便でも、養子親への義理有れば、かくまふ事は扨置いて、親が繩かけ出さねばならぬ、あゝどうぞ來てくれねばよいが、爰らあたりをまごつきはせまいかと、四年以來逢もせず、なつかしい子の顏を、見ぬ樣に〳〵と雜行ながら神たゝきも不便さからアヽとはいふ物の、若死にする人の一生、義理有る親を牢へ入れ、おめ〳〵と逃隱れて、來世末代不幸の惡名、所詮逃れぬ命なら、一日なりと妙閑殿を、早う牢から出すのが孝行覺悟極めて名乘つて出いシタがそれもどうぞ、親の目にかゝらぬ所で繩にかゝつてくれ、エヽ現在血を分けた子に、早う死ねと敎へるも浮世の義理か是非もなや、何故前方に內證で、斯々した傾城に、斯うした譯で金が入ると、便宜でもしをつたら、久離切でも、親子じや物、隱居の田地を賣立ても、首繩はかけまいに、皆あいつが心から、其の身もせまい苦をしをつていとしほなげに嫁御に迄思ひも寄らぬ憂目を見せ、知音近附親に迄、隱れる樣に身を持ちなし、ろくな死もせぬ樣に、此親はうみ付けぬ、エヽ憎いやつぢやと思へどもかわゆうござると泣しづみ、わけたる血筋ぞ哀なる。

涙の隙に巾着より金一包取出し、これは京の御本尊樣へ、上げやうと思ふた金なれど、嫁と思ふてやるではない、只今のお禮の爲め是を路銀にちつとなと、遠い所へ往て下されと、渡せば梅川押いたゞき、お心付いたこのお金、逆樣乍ら戴きます、大阪を立退ても、私が姿目に立てば、假竹輿に日を送り、奈良の旅籠や三輪の茶屋、五日三日夜を明し、廿日餘りに四拾兩、つかひ果して一分殘る、金故大事の忠兵衞樣、科人にしたも私から、嘸憎からうお腹も立とうが因果づくと諦めてお赦しなされて下さりませ、親子は一世の緣とやら、此世の別れにたつた一目、逢ふて

進ぜて下さんせと、奥の障子を明けるを、引留め、ア、コレ益體もない／＼、たつた今もいふ通り、例詞はかはさいでも、顏見合したりや繩かけるか、おれが口から訴人せにや、養ひ親への義理が立ぬ何ぼ義理が立たい迚、親の手づからどう繩が、かけられうぞいの、御尤でござりまず／＼そんなら顏を見ぬ樣にと、傍に有合手拭取り、泣々後に立廻り、慮外乍らめんない千鳥、御不自由にはあらうが斯うさへすれば、傍にござつても構はあるまい、オ、オ、忝なうござる忝なうござる、物云はずと顏見ずと、手先へなと障つたら、それが本望逢た心、親子一世の暇乞、必ずこなたの連合に、物いはして下さるなと、悅ぶ中に忠兵衞は、嬉しさ餘り駈出でゝ、互に手と手を取かはせど、互に親共我子共云はずいはれぬ世の義理は、涙湧出る水上に、身を浮く計りに泣かこつ。折から聞ゆる多くの人音、二人を奥へとつきやり／＼、コレコレ女中、あの物音は慥に捕手、此裏道の小河を渡り藪をぬければ御所街道早う／＼と氣をもむ所へ、順禮すがたの八右衞門利平もともに蛋取眼、役人大勢打つれ立ち、この内がきぶさいと、どか／＼どかと込入る所へ、組子二人かけきたり、所は長谷の山つゞきに、梅川忠兵衞と名乘る者、休みおつたを追つ取まき、からめとらんといたせ共、中々手に合ひ申さずと、聞くより小頭扨こそ／＼來たれ續けと引かへせば二人も俱に飛で行く。孫右衞門は飛び立つ嬉しさ、天の助けかたじけないと裏道見やつて延あがり、オ、そうぢや／＼其道ぢや、ソレ其藪をくゞるなら切株で足つくなと、屆かぬ聲も子を思ふ、平沙の善知鳥血のなみだ、永き親子の別れには、安かたならでやすき氣も、涙々の浮世なり。

× × × ×

切 三勇士名譽肉彈

下元旅團長　竹本大隅太夫
江下一等兵　竹本相生太夫
北川一等兵　豐竹呂太夫
作江一等兵　豐竹つばめ太夫
松下中隊長　竹本鏡太夫
小隊長　竹本南部太夫
馬田軍曹　竹本隅榮太夫
內田伍長　豐竹長太夫
便衣隊　竹本淀路太夫
三味線　鶴澤友次郎
豐澤仙絲
鶴澤友造
鶴澤友衞門
鶴澤清二郎

松居松翁原作
鶴屋南北脚色
鶴澤友次郎作曲

切 三勇士名譽肉彈

「爆彈三勇士」の功績は演劇、映畫歌曲其他あらゆる方面に作られて絶讃されてゐますが爰に日本が世界に誇る唯一の鄉土藝術文樂座人形淨瑠璃に是非上演し不朽の名譽を胎し傳へんため永い傳統を持つ人形淨瑠璃道に新境地を拓いて劃期的なるこの上演を見た次第であります。昭和七年二月二十二日上海に於ける皇軍が戰略上敵陣地廟行鎭を是非占據せねばならぬ。突擊路開拓の決死隊に撰ばれた中の作江、江下、北川の三勇士は祖國のため自ら體に爆藥の破壞筒をつけて世界空前の壯烈な戰死をした大和魂の奮ひ立つ一曲であります。

（床本）

志士は溝壑にあるを忘れず勇士は其元を喪ふを忘れずとかや、時しも昭和七の年、月は如月下二日御國に忠を築紫路の譽も高き三勇士、語り傳ふる敷島の大和の國の櫻花幾千代かけてにほふらん。爰は所も上海に近き村落麥家宅、霜さへ氷る曉に間近く敵を沖の石かはく間もなき汗や血に、まみれてつくす工兵の其塹壕に前進の命を松下中隊長折しもあれや舊曆の十

胡弓　鶴澤友駒

人形

松下中隊長　吉田玉松
便衣隊　桐竹紋太郎
馬田軍曹　吉田玉市
大島少尉　吉田小兵吉
東島少尉　桐竹政龜
古島田一等兵　吉田玉幸
川一等兵　吉田光之助
高野一等兵　吉田覺三郎
黒澤一等兵　吉田玉德
村田一等兵　吉田瓢壽呂
村上一等兵　吉田傳之助
北川一等兵　桐竹紋十郎
江下一等兵　吉田文五郎
作江一等兵　吉田榮三
下元旅團長　吉田玉次郎
内田伍長　吉田文作
兵士　大ぜい

七日の月冴えて怪しの人のうごめく影、誰か〳〵ハイ私は廟行鎭鐵條綱ある咄し澤山〳〵する事有中隊長殿怪しい奴をとらへました、ムよし連て來い、ハイ、オイ、言ムよし連て來い、ハイ、オイ、言事が有ならそこで言へ、それ廟行鎭中々堅い、機關銃澤山ある日本兵少ない中々落る事ないナ、外へ廻るヨロシイナ、黙れ貴さまは誰に頼まれてそんな馬鹿な宣傳をしに廻りよるか、怪しい奴だ、馬田軍曹縄れ、ハハア中隊長殿危ない事でしたナ、あぶない事だつた、オイ、馬田軍曹そやつ何か持てゐないか身體檢査をして見よ、ハア中隊長殿軍隊手帳がありました、ムそふか、第十九路軍の正規兵です。ムで扨はそうかと顏見合せ、油斷ならじと囁やく折しも軍用電話、けたゝましく内田伍長は取上て、ハ、ハ、松下中隊で有ます旅團命令で有ますか、ハ、ハ、、、復誦、本隊は其主力を持て二十二日午前五時三十分を期し廟行鎭の總攻擊を開始す、松下中隊は其正面の鐵條綱を爆砲し、五個所に歩兵突擊路を開くべし、終り、ハ、ハ、ハ、分りました。中隊長命令が參りました、ム、中隊長殿電話に出て下さい、よし、ハ、松下大尉であります、ハハ分りました、本中隊は直ちに決死隊を募り確かに其時間までに敵の鐵條綱を破壞し完全に突擊路を開きます。

終り、と答ふる聲も覺悟の一諾、馬田軍曹進み寄り、中隊長長殿旅團の御命令でもあの敵の鐵條網は實に構築堅固で我爆擊機が日夜必死の奮闘の未だ何等の效果も無く尋常一様の手段では迎も駄目だと思ひます。とつぶさに語る敷情に、松下大尉につこと笑ひ、其出來ない事を仕遂るが日本軍人の誇りで有る。日本軍人の上には常に天祐有て守るゝ、是日の本の常ぞかし、小隊長集れ、只今の旅團命令に依て當中隊は決死隊を募る、大島小隊長は三名宛二組の先發斑、後續班の決死隊を選拔せよ、東島小隊長は豫備班として三名の決死隊を選拔せよ、終り、復誦、大島小隊は、三名宛、二組の先發班後續班の決死隊を選拔します終り、よし、小隊長は選拔兵を集めてくれ、ハイ第一小隊島田一等兵古川一等兵高野一等兵、黑澤一等兵村田一等兵村上一等兵集れ、第二小隊北川一等兵江下一等兵作江一等兵集れ、聲に應じてばらゝと居並ぶ諸士の勇しや、氣を付け、番號、一、二、三、四、五、六、七八、九、集合終りました、よし扨て、九名の者に中隊長は一言す、只今旅團命令が降た、本中隊は正面の鐵條網を破壞し、五條の突擊路を開くべき重大なる任務を受た是本中隊の無上の光榮である。しかし此作業は尤も困難である。されば今日迄多くの兵士は倒れ、様ざまの犧牲を拂つたが中々堅固の要害である。本隊は誓て、此名譽ある任務を全うし、目的を成就しなければならない、そこで爰に決死隊を募る、依て此決死隊に選拔せられたお前達は一命を賭して此任務を全ふしてくれ、ハイ、我々は決死の覺悟をもちまして、事に當ります、ヲ、よく言つてくれた、嬉しいぞつ、諸君が國家の爲に盡さんとする赤誠の精神に對し松下大尉愈々感激にたへない畏れ多いことではあるが、大元帥陛下に置かせられては此忠誠を聞し召さば嘸や至情の發露ぞと御嘉納あらせらるゝ事であらふ、皆わかつ

たか、ハイ、わかりましたと意氣冲天の勇士の言葉、ヲ、勇ましい天晴だ、と口には言へど心には御國の爲とは言ながらあたら勇士を戰場の土と化するか、哀やと怯む心を取直し、氣を付け、只今より擧手の禮を以て袂別にかへる敬禮互に擧手の一禮はこれぞ此世の名殘りぞと別れてこそは進み行く。

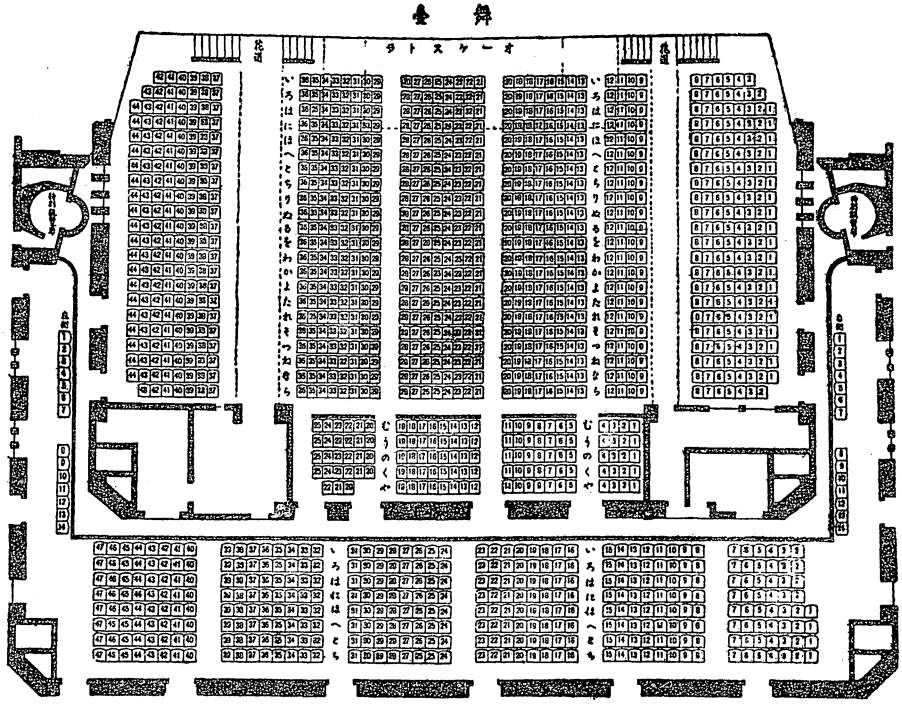
時の至るを三人が月の光りをあびながら、語るも淸き、戰友の胸の內こそ由々しけれ、作江伊之助こなたを見やり、ァ、月はますます冴えてゐるナァ、オイ北川なにをぼんやり考へてゐるのだ、何か國の事でも思出したのか、ナニそうじやないよ、おれはひそかに謀事をめぐらしてゐる、とでもいふのかな、兎に角考へてゐるんだ、ナニ謀事ハ・・・考へもくそもあるものか、此場合手段はたつた一つしかないのだ。貴樣の手段ての は大抵見當がついてるよ、負ずぎらいの貴樣の事だから、鐵條網へ喰ひつかふとでも言ふんぢやろ、狼じやなか、よせやい、アハ・・・互ひに通ずる心と心、オイ江下ゐるかと言ひつゝ來る內田伍長ハッ江下居ります、お前國から、郵便が來てゐるぞ、お前ばかりうまくしてゐるナァ、貴樣も昨日來てたじやないか、そふだつたナァ、併しお前達選拔にあつてよかつたな、中隊長殿の御訓示もあつたが皆しつかりやつてくれよ、中隊長殿の處へもう一度來るだらう、其時又逢はふ、待つてゐるぞ、と言捨てこそ急ぎ行く、江下手紙取上れば、オイ江下どこから來たんだお父さんからか、イヤ家からじやないよ。何處かの子供からだ、では慰問の手紙か、ァ、コレハ此間日本を立つ時久留米の停車場で逢つた少年からの手紙だ、フム、ではお前に天子樣の爲に働いて下さいといふ、激勵の言葉を與へてくれたと言つて、スツカリ昂奮して居たアノ小學生からの手紙なのか、おれはアノ少年の一言の爲にいつでも死ぬる氣になつて、愉快に日本

を出て來る事が出來たんだ、モウすぐ死るかもわからないが、こふして呑氣にしてゐられるのは矢張りァノ少年の力なんだ、マァ見てくれよ、こんな事が書いてあるよ、私の大事な兵隊さん、あなたは立派な手柄をして、久留米へ歸つて來る日を私は毎日指を折てまつて居りますよ、あなたの凱旋の時には家中お父さんもお母さんも兄さんも妹もみんなで迎へに行きます、私の大事な！〳〵兵隊さん、本當に天子様の爲に働いて死ないで歸て來て下さい、ァ、可愛い事をかくもんだナァ、他人でさへこんなだもの、北川、江下に貰い泣きはいゝが江下が死んだらお前も死ぬか、江下が死なくつたつて、どふせ死ぬんじやないか、ウム、そふだ、アノ鐵條網と來たら今まで誰も手がつけられなかつたんだからな、一寸でも傍へよればソクボウ砲や爆擊砲であびせかけられるんだから、どふせのがれつこはないんだ、そふだ、破壞筒をかつぎ込んだところで、口火をつける前にみんなやられて仕舞ふんだからな、今度こそは此我々の最後の働きが日本軍隊の運命に關するんだから、しつかりやらなくつちやいけんぞッ、ムゝさつきお前が言つた謀事と言つたのは其手段を考へてゐたのか、俺も先刻から決心してゐたんだ、決心ならおれだつてしてゐるんだ、それなら三人共同じ事を考へてゐるんだな、そふだ、じや破壞筒を自分の體へくゝりつけて體と一緒に爆發させる考へなんだナ、ウム此方法が一番上策なんだからナ、上策の下策のといつてコレが日本軍隊に取てたつた一つの名策なんだ、自分自身が爆裂彈と一緒に敵の鐵條網へ飛込まふといふんだ、是程慥な爆發の方法はないからナ、やろか、やろふ、しつかりやらふぜ、日本帝國の爲だ作江、江下、北川、サコレデお互の一生の別れだ、水盃といふ處だがどふせ火に燒かれて死ぬ體だ一つ煙草の呑廻しといふのはどふだらうナ、成程、こいつは面白い

デハ作江、お前から呑み初めろよ
じやおれから呑むとしよふよし來
た、煙りはうすき紫の其あかうば
ふ譽れの火互ひに目と目心と心、
併しこうして死を決して見ると存
外氣が樂になるもんだナァ、おれ
ア是から芝居でも見に行く樣なほ
がらかな氣がしてゐるんだよ。お
れだつてそふだ、こうなると何だ
か呑氣になれたよ、併しうまく鐵
條網に近付ければいいが、そこが
天祐だ、此三人の意氣で彼奴等を
めくらにして見せらアオイソーラ
見ろ、雲が出て來たぜ、月が隱れ
てくれりやいゝがナァ、フんアノ
雲の具合じや、大丈夫だ、ハヽアい
ゝ月だナァ、十七日の月だ、アレを
見ると思ひ出さずにやゐられねエ
ナ、お國の母さんに別れた晩の事
か、作江アノ晩の貴樣の話を聞い
た時、おれは貰ひ泣をしたよお前
のお父さんに日露戰爭のとき輜重
輸卒だつたので、勳章一つ貰はず
に歸つて來たといつてお母さんは
一緒になつて口惜がつてゐたそう
だな、今度こそは此事を聞たらお
前のお母さんも泣て嬉しがるだら
う、ムヽ子供の時から始終言はれ
てゐたんだ、立派な軍人になつて
國家の爲に働いてくれつて、其時
が今恰度やつて來たんだ、おれは
それを思ふと北川、江下俺も嬉し
いよ、しつかりしろよサァモウ時
間も迫つて來たから、そろ〳〵仕
度をしなければなるまい、フム中
隊長殿に此計畫を報告して行かな
ければいけないだらふ、サァアノ
人情深い中隊長殿の事だから、い
くら決死隊とは言へ、始めから死
でかゝる樣な無茶な事は許さない
かも知れないぞ、それもそうだ謀
事は密なるを何とか言ふ事がある
だらふ、仲間にも黙つて別れた方
が一層サバ〳〵してよかばい、成
程それもそふだナ、男らしくて、
其方がいゝや、サァ是で此世に思
ひ殘す事はない、ではボツ〳〵出
掛けよふぜ、折しもきこゆる機關
銃、三士は耳を傾けて、オヽ先發
班が出發したぞ、爆發せんじやな
いか、不發らしいぞ、オウ後續班

も出發したぞ、やられたらしいな、フム味方は慥かに仕損じたぞあきれて暫し言葉なし、馬田軍曹かけ來り、オイ殘念だ先發班後續班も全滅したぞ、殘るはお前達ばかりだ。右翼は危機に瀕してゐる大日本帝國の爲だ賴むぞ〳〵〳〵言捨てゝこそ急ぎ行く、サ愈々やるのだ、見ろ月が隱れたぞ、天祐だ〳〵たぞ有難い〳〵〳〵三人目と目を見合はせて、心の覺悟御國の爲、身は肉彈の三勇士、流石は櫻大和の誇り、其花またぬ勇士と勇士、互ひに抱き月影も雲にかくれて打出す砲彈の響き轟きて廟行鎭の要害は蜘蛛手と張りし鐵條網近づく事もならの葉の此手かの手も盡果て、策をほどこすすべもなし、折しも忍ぶ三人の影、破壞筒をひんだかへ亂射亂擊ものかはと探照燈の光りをさけ、鐵條網にせまり行く、天祐だぞ、オイ、點火だ〳〵よし來た、天皇陛下萬歲大日本帝國萬歲〳〵の聲もろとも、天地もゆるがす大爆音さ、しもほこりし堅壘も破れて爰に突擊路、夜は明はなれ東天に輝き昇る日の御旗下元少將しづ〳〵と隊伍とゝのへ立出る。氣を付けつ、松下大尉の報告を委しく聞いて旅團長あまたび打うなづき、扨ては北川江下作江の三勇士の爲に堅固の鐵條網も破壞され突擊路は開かれ容易に我軍の勝利になつたるも、是三勇士の賜物じや、爰に下元旅團長以下戰友一同謹んで三士の英靈に氣を付け捧げ銃、（これより軍歌合唱）肉彈こゝに奏功の譽れを世々に傳ふらん。

昭和七年五月八日印刷
昭和七年五月十日發行
東京市本郷區駒込富士前町四十三番地　藤田篤
編輯兼發行人
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者　東興亮
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　共同印刷株式會社



東京劇場客席表

五月の芝居案内

座名	狂言名題	出勤俳優	觀劇料	前賣用電話
木挽町 歌舞伎座 二日目初日 午後三時開演	假名手本忠臣藏 通し八場 大序より七段目まで 中幕 新古演劇十種の内 茨木 長唄囃子連中 芳村伊十郎出演	菊五郎、福助、男女藏、菊三郎、伊三郎、照藏、菊右衛門、源之助、彦三郎、幸四郎 ○ 吉右衛門、三津五郎、時藏、吉之丞、七三郎、染五郎、竹三郎、九藏、友右衛門、宗十郎	座席 一等 六、八〇 二等 四、二〇 三等 三、二〇 四等 一、五〇 五等 八〇	京橋 自三三一 至三一五
濱町金座 明治座 一日目初日 午後四時開演	一新版伊太八縞 三幕 一父歸る 一幕 一箕輪の心中 三幕 一連獅子 長唄囃子連中 女山賊（間狂言に御寵に入れ候）大切尚武刀長唄囃子連中	左團次、松蔦、莚升、左升、紅若、廣太郎、段四郎、家橘、秀調 ○ 猿之助、鶴子、八百藏、荒次郎、十藏、千代麿、染五郎、芝鶴、壽美藏、幸四郎	一等 五、〇〇 二等 三、〇〇 三等 二、〇〇 三階席 八〇	涙花 五九九 三九 〇八 九四
新宿 新歌舞伎座 四日目初日 午後五時開演	得意の狂言五種を揃へて 曾我廼家 五九郎一座		一等 一、五〇 二等 一、〇〇 三階 四〇	四谷 六六 〇〇 四四 四七

食堂・賣店御案内

五階

1 廣間
2 休憩室
3 便所
4 和食堂

四階

1 喫煙室
2 支那食堂
3 賣店
4 賣店
5 和食堂
6 壽司
7 餐館
8 便所
9

三階

1 洋食堂
2 賣店
3 賣店
4 賣店
5 化粧室
6 みつ豆
7 便所
8

二階

1 玄關廣間
2 喫煙室
3 喫煙室
4 便所
5

一階

1 喫煙室
2 賣店
3 賣店
4 喫茶室
5 和食堂
6 便所

地下室

1 喫煙室
2 賣店
3 賣店
4 均一食堂
5 喫煙室
6 便所

食堂賣店御案内

◇御食事は成るべく一幕前に御注文下さる樣お願ひ致します
◇食堂其他へお出の節はエレベーターを御利用下さい

五階

◎大食堂

定食料理五品 弐圓
御飯付
三重辨當椀付 壹圓卅錢
重辨當同 壹圓
親子鯛辨當同 壹圓
さしみ辨當同 壹圓
玉子燒辨當同 壹圓
さしみ 六十錢
すの物 五十錢
つまみ物 五十錢
いか燒 五十錢
うま煮 五十錢

御酒 大 五十錢
小 二十五錢
同 ビール 五十錢
サイダー 二十五錢
シトロン 二十五錢
レモン 二十五錢

御食事の前注文は地階食堂前にて承ります。

四階

◎正面食堂

入口は三階正面

重辨當 五十錢
子井 五十錢
おめし 五十錢
おん 三十錢
酒 大 五十錢
小 五十錢
ビール 二十錢
サイダー 二十錢
シロンレモン 二十錢

◎西側食堂

うなぎ蒲燒さしみ定食 弐圓
お椀御飯付
うなぎ二重箱同 壹圓卅錢
さしみ 五十錢
つまみ物 五十錢
いか燒物 五十錢
まか燒 五十錢
酒煮燒物 五十錢
小 五十錢
御酒 五十錢
ビール 五十錢
サイダー 五十錢
レモン 五十錢
トロン 五十錢
ダー 五十錢
ビール 五十錢
夏料理 ソーメン 十五錢

三階

◎東側食堂

ちくわ 五十錢
しら 五十錢
しら 五十錢
ソーダ水 二十錢

◎正面食堂

三重辨當椀付 壹圓卅錢
親子辨當同 壹圓
さしみ辨當同 壹圓
すのもの 六十錢
つまみ物 五十錢
いか燒物 五十錢
まか燒 五十錢
煮燒物 五十錢
酒 大 五十錢
小 五十錢
ビール 二十錢
サイダー 二十錢
シロンレモン 二十錢

◎正面賣店

エハガキ

◎西側食堂

定食料理三品 壹圓卅錢
支那料理
食料理三品 壹圓
御飯付
華飯 五十錢
賣一人前 二十五錢
蒸 六十錢
甘酢 六十錢
蒸玉燒 六十錢
鶏に 八十錢
か燒 二十錢
豚燒 二十錢
ソーダ水 二十錢

二階

◎東側喫茶

コーヒー 十五錢
紅茶 十五錢
ケーキ一ケ 十錢
しるこ 二十錢
ぞうに 二十錢
つう 二十錢
煮豆 二十錢
ソーダ水 二十錢
むしすし 五十錢

◎西側食堂

定食 壹圓卅錢
西洋料理 喫茶
スープ 五十錢
魚フライ 五十錢
チキンカツ 六十錢
チキンライス 五十錢
カレーライス 五十錢
ビフテキ 八十錢
サンドウキッチ 五十錢
レモンスカッシ 三十五錢
オレンジスカッシ 三十五錢
グレープジュース 三十錢
プリン 二十錢
コーヒー 十五錢
紅茶 十五錢
ケーキ一ケ 十錢

地階

◎東側喫茶

ソーダ水 二十錢
アイスクリーム 二十五錢
レモンスカッシ 三十五錢
ケーキ一ケ 十錢

◎賣店

エハガキ
洋酒 種々

◎西側食堂

三重辨當椀付 壹圓卅錢
親子辨當同 壹圓
玉子燒辨當同 壹圓
さしみ 六十錢
すの物 五十錢
つまみ物 五十錢
まか燒 五十錢
うま煮 五十錢

◎西側ローカ賣店

◇御注意

一、お座席の番號はお忘れなきやうに。
二、お帽子は椅子の下或はお預り所へどうぞ。
三、お持ち物はお預り所へ、そしてお歸りの節は混雜いたしますから、是非共終演一幕前にお受取の程を。
四、御祝儀御心附などは必ず御無用に、又女給、食堂係員其他に不都合がございました節は、御遠慮なく事務所までお知らせを願ひます。
五、場内での喫煙は喫煙室、廊下、食堂の外堅くお斷りいたします。
六、下駄の方のお歸りは地下室の下足札指定の出口へ、混合ひますから番號の御記憶を。
七、お忘れ物は事務所で保管いたしますが、何卒皆様各自にて御注意を願ひます。
八、公衆電話は地階正面、二階廻り廊下、三階正面の三個所に、此外お客様用電話として一階の東西預り所に一本宛ございます。
九、御申込の自動車券は一階廊下東側で承ります。
十、お迎への自動車でお歸りの方は西側（電車道）のお出口により、御出口により、御申込の自動車でお歸りの方は東側の御出口より願ひます。
十一、場内にての御撮影は堅くお斷り申します。
十二、汽車の時間表は玄關萬承り所にてお問合せを願ひます。
十三、五階に托兒所の設備がございます。

前賣切符の御利用願ひます

わざ〳〵御來場下さいましても滿員の爲め不止得御入場を御斷り申上げる場合が往々御座います故御便宜上前賣切符の御買求めを願ひます。
前賣切符は御觀劇日と等級とを御指定の上、電話又は御使にて御用命下さいますれば市内に限り、遠近に拘らず御一名様にても直に御屆けいたします故、御觀劇には最も御便利な前賣切符の御利用を願ひます。

築地 東京劇場

前賣用電話京橋自五一五一番至五一五六番

松竹シアタ・ビューロウ

元來演劇は古く呱々の聲をあげました頃より一般國民の趣味嗜好に適ひその生活に溫い慰安と美しい感激とを與へて居りましたが、最近彌々その感を深くし新しく良き生活要素を供給する必要機關となつて居ります。然るに。近時の劇界は誠に多事多難、今更ながら是を管掌する私共興行者の責任の重きを考へさせられます　そこで今度新設致しましたのが「松竹ビューロウ」で御座います。我が松竹興業株式會社は創業の當初より好き狂言の選定はもとより、劇場の設備又は觀客待遇の進歩改善等に專ら留意し飽くまでも萬全を期して不斷の努力を續けて參りましたが、此の際更に一歩を進め、輿論を尊重する意味に於て廣く演劇御愛好の皆樣から御意見を承り御注意も拜聽して、一般の御滿足を充分になし得ますやう倍々盡力致し度いと存じます。右の趣旨を尙委しく申しますと、

一、上演に適當なる脚本又は脚本となるべき資料の提供又は推薦（例へば御自身御友人其他世間未知の脚本、脚色に適せる小說、文藝作品、劇的興味ある出來事、巷說等の提出又は推薦）

二、各興行の出し物その配列、配役等に對する希望並に批評等の提出

三、劇場內の諸設備其他一般從業員の觀客待過、食堂賣店に關する注意の提出

四、但右御提供諸材料、御意見等の採否は會社に御一任を願ひ採用の場合は適宜謝儀を呈する事

五、個人又は團體御觀劇に就いての劇場選擇、內容萬端の說明、主催者側への御手助け　等總て觀客の御便利となるべき御相談相手

以上の如きが此の松竹ビューロウ設立の趣意で御座います。何卒我が社の微衷御認めの御敎示御指導の程を希ひ上げ奉ります。

松竹ビューロウ

東京市京橋區新富町六丁目十番地（松本社內）

電話京橋四・一三一より四・一三八まで

松竹映畫の芳香は

五月の新緑の香よりも高し

勅諭下賜五十年記念
陸軍少將櫻井忠溫原作・吉田百助・松崎博臣脚色
清水宏指揮・石川和雄・佐々木康・松井稔・
井上金太郎・渡邊哲二・監督
小田濱太郎・佐々木太郎・杉本正二郎・寄木勇・
石村蘇鐵・森尾鐵郎・撮影

陸軍大行進

蒲田・下加茂・兩撮影所總動員・
出場人員十萬餘人
重なる出演者——岩田祐吉・藤野秀夫・
奈良眞養・武田春郎・城多二郎・
江川宇禮雄・雄河村黎吉・川田芳子・
花岡菊子——林長二郎・高田浩吉・
尾上榮五郎・阪東好太郎・浦波須磨子・
飯塚敏子・井上久榮・大林梅子・

菊池寛原作・(婦人倶樂部連載)・小田喬脚色
成瀨巳喜男監督・猪飼助太郎撮影

蝕める春

若水絹子・逐初夢子(新入)・竹内良一主演
泉博子・水久保澄子(新入)・江川宇禮雄・
齋藤達雄・小林十九二・岡田宗太郎・
新井淳・藤野秀夫助演

赤穗春雄原作・柳井隆雄脚色
野村浩將監督・高橋與吉撮影

戰爭と與太者

磯野秋雄・三井秀男・阿部正三郎主演
絹川京子・武田春郎・押本映治・
小林十九二・坂本武・大山健二・
一木歡助演

犬塚稔原作・脚色・監督

祭唄美代吉殺し

林長二郎・八雲恵美子主演

大佛次郎原作・二川文太郎監督

鞍馬天狗

高田浩吉・阪東好太郎・尾上榮五郎主演
千早晶子・飯塚敏子・大林梅子・堀正夫助演

松竹映畫
封切館

浅草・新宿・麻布・築地・浅草・横濱
帝國館・松竹館・松竹座・新館・常設館

香味優秀　品質一等賞

◎ミツワ煉齒磨

脂臭く無く、苦味無く、味良く匂が快いから使用後すぐと玉露の茶を飲んでも、些しも其茶の微妙な香味に障りません。

齒を清くし、齒齦を斂め、口中の靡爛を防ぎ、口腔の防腐、消毒及制酸の效力を有し、齲齒の豫防に效があります。

德用大形（七十瓦）入　二十錢
携帶用中形チューブ入　十錢

（縮寫圖）

本邦唯一　處方明記

ミツワ家庭藥

みつわ・かていやく

効力最も確實なる藥三十二方を揃ふ

理學博士藥學士　小平勳氏監製劑

劃時代的の

一、處方を明記して内容を公開す
一、處方的確にして奏效確實なり
一、製劑精確にして效力一定不變なり
一、藥品純良にして中毒の危險無し
一、容器完全にして變質の虞無し
一、内服藥は錠劑にして服用し易し
一、價格低廉にして長く保存に耐ふ

家庭藥です

製劑監督　理學博士藥學士　小平勳氏

説明小冊子御申越次第送呈

ミツワ各種製品にして萬一御近所の取次店に品切れ等の節は日本橋區米澤町（兩國橋畔）の本舗（電話濱花67）三〇番か四四八番、又は四四六一番）へ　お電話かお葉書にて御註文次第　假令一瓶一箇にても　市内は早速配達御供給申上ます。

全國の藥舗にあり　◎ミツワ家庭藥の種類◎　若し無き時は本舗へ

ミツワ健胃錠	ミツワ胃腸散	ミツワ消化錠	ミツワ制酸錠	ミツワ緩下錠	ミツワ含嗽錠	ミツワ清腸錠	ミツワ驅蟲錠	ミツワ清涼劑	ミツワ解熱錠	ミツワ鎮咳錠	ミツワユーズ	ミツワ人參錠	ミツワ婦人湯藥
ミツワプレトロピン	ミツワリノセニン	ミツワ點眼液	ミツワ鼻病液	ミツワ齒痛液	ミツワ鎮痛藥	ミツワ蟯蟲液	ミツワ養毛液	ミツワ腋臭藥	ミツワ撒布藥	ミツワ軟膏	ミツワ制痒膏	ミツワ頑癬膏	ミツワ婦人坐藥
ミツワ鎮靜錠	ミツワ雪の雫												ミツワ痔坐藥

◎ミツワ石鹼本舗　東京　丸見屋商店

◎ミツワ石鹸
サーワ白粉
含鉛白粉と同様に
ノビよく、ノリよき
純無鉛白粉
サーワ白粉
Mitsuwa Soap
ミツワ石鹸
金拾五錢